
Sand Land Story ～砂に埋もれし戦士の記憶～

ゲーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S a n d L a n d S t o r y 　　砂に埋もれし戦士の記憶

【Nコード】

N 8 6 6 9 X

【作者名】

グーメアー

【あらすじ】

世界を巡る旅を続けていた青年、シロヤと相棒のクロト。一人と一頭が最後に立ち寄った国、バスナダ国。そこでシロヤは、一人の女性を助けた。その女性と出会ったシロヤの運命は、大きく激変することとなるのだった・・・。

入国

「後は・・・バスナダ国だけか。」

森の中の一本道に、青年が馬に乗って歩いていていた。青年の名はシロヤ。どこにでもいる一般的な青年だ。背丈は一般男性と同じくらいで、背中に細身の剣を携えていた。

「バスナダに行ったら名物料理を食べて一泊しようか。スタンプは明日にしよう、クロト。」

クロトと言うのは、彼の相棒とも言える黒い毛の馬の名前だ。決して足の早い名馬という訳でもない、単なる一般的な馬だ。クロトは、シロヤが初めて馬の出産に立ち会った時に産まれた馬だ。シロヤにとって、クロトは弟のような存在なのだ。

「さあクロト、バスナダの国境が見えてきたぞ。」

「バスナダ国の入国手続きをお願いします。」「おお、久々の入国者か。歓迎するぜ。」

国境にいた中年男性が、書類に色々と書き始めた。

「若いのに世界を巡る旅か・・・流浪の旅かい？」

「いえ、国中のスタンプを集めているんです。」

国にはそれぞれ国を表すスタンプがあり、それを集めて世界を旅する人も少なくはない。シロヤもその一人なのだ。

「んで、今スタンプはどれくらい集まったんだい？」

そう聞かれたシロヤは、一枚の紙を広げた。

「ひい、ふう、みい・・・ほお！バスナダ以外のスタンプは揃っているのか！？いやあこの国が最後たあゝ嬉しいねえ！」

中年男性は書き終えた紙をシロヤに渡した。

「まあ砂漠ばっかの国だけどゆっくりしていきな。俺の名前はラン

ブウだ。なんかあったらここに来な。」

「ありがとう、ランブウさん。」

シロヤとクロトはゆっくりと進みだした。

砂漠の国だが、国境付近はまだ森地帯だ。森の中の一本道を歩くシロヤとクロト。

「とりあえず宿を見つけよう。確かこの国の名物は甘砂まんじゅうと……。」

キャー！ー！！！！

森地帯に響く女性の悲鳴。シロヤは名物料理の思考を止めて、クロトの手綱を引いた。

「こっちの方から聞こえた！行くぞクロト！」

全速力で走るクロト。走りながら、シロヤは背中の剣を抜いた。
「見えた！アレだ！」

シロヤの目線の先に、大きなトカゲが人を襲っている。襲われている女性は、恐怖でさっきのような悲鳴をあげられないみたいだ。大きなトカゲはバシリスク。森地帯に住む低級の魔物だ。

「バシリスク程度ならいける！行くぞクロト！」

シロヤは剣を低く構え、バシリスクを狙う。狙われたバシリスクは足音でシロヤ達に気付き、すぐさま戦闘モードに入る。牙を剥き出しにし、今にも飛びかかるとしている。

「……勝負！」

飛びかかってきたバシリスクを交わし、後ろから剣を背中に突き刺す！

ギシャアアアア！！！！

バシリスクは剣を背中に刺されたままの状態に奇声をあげ、そのまま動かなくなった。

「ふう・・・なんとかいった・・・。」

剣に刺さっているバシリスクを抜き捨て、襲われていた女性に目を向ける。凜とした目は女性の芯の強さを感じる。

「助けていただきありがとうございます！」

深々と頭を下げ、礼を述べる女性。来ている服は上等な者で、彼女の裕福さを物語っていた。

「いえ、この辺は危険ですので気を付けてください。しかし何でこんなところに一人で？」

女性は目を閉じて黙った。言葉を考えているような感じだ。

「さっきこの国に帰ってきた、だから・・・。」

「よかったら安全なところまで一緒に行きませんか？」

女性はシロヤの言葉を聞くと、フツと軽く笑って走り出した。

「結構です！もう安全な場所に来ましたから！」

そう言っただけで女性は走り去っていった。その先には、砂漠と行き交うたくさんの人々の姿があった。

祭典

「ここがバスナダの街か・・・。」

シロヤは周りを見渡した。

もつと建物が点々としていた街を想像していたシロヤにとって、行き交うたくさんの人々やたくさんさんの高い建物、そして目の前に見える大きな城は予想外だった。

「とりあえず・・・宿をとるか・・・。」

「ああゝ！やつと休めるゝ！」

宿の一室をとったシロヤは、ベッドに思いっきり倒れこんだ。バスナダ国に来るまで無休だったことに加え、めったにしない魔物退治までやってしまったため、倒れこんだ瞬間に一気に眠気が襲った。

「・・・zzz」

「・・・！」

急に目が覚めたシロヤは窓の外を見た。時刻はもう夜で、空の色は真っ黒だ。その下、宿から見れる街は、今が夜であることを忘れるぐらい明るい。窓の外からは小さく陽気な音楽が聞こえ、人々の陽気な声が聞こえてきた。

「・・・祭り・・・祭り！」

シロヤは眠気が残る頭を軽く振って、身支度を軽く済ませて宿を飛び出した。

「クロト！祭りだ祭りだ！出店回りするぞ！」

クロトは嬉しそうに足をバタバタさせた。

「よしクロト！まずは甘砂まんじゅうだ！」

シロヤはクロトにまたがって走り出そうとした。

その瞬間、

「こらお前！これからパレードカーが来るんだぞ！馬なんかで街中を回るんじゃない！」

近くにいた宿の主人に呼び止められた。

「パレードカー？何ですかそれ？」それを訪ねた瞬間、流れていた音楽がさらに激しくなり、祭りを楽しむ人たちの声が一点に集中した。その先には、夜の街をさらに明るく照らす華やかなパレードカーが走っていた。

「今日は女王様のご帰還記念祭だからな。いつもよりパレードも華やかだ。」

「ご帰還記念祭？」

シロヤとクロトは首を傾げた。

「何だお前、よその国から来たのか？今日の昼にシアン女王様が遠征からご帰還したのだ。だから国民は女王様の無事を祝ってこうしてパレードをしているのだ。」

パレードカーを見上げているシロヤとクロトに向かって、宿の主人が言葉を続けた。

「パレードカーの上に座っておられるのが、我らがバスナダ国女王、シアン様だ！」

パレードカーの上には、これまた華やかなドレスに身をまとった美しい女性が座っていた。右と左を交互に見て国民に笑顔で手を振っていた。笑顔ながら、凜とした表情が見てとれるのは女王の素質があるからだろう。

そんなことを思いながらパレードカーを眺めていたシロヤ。

「・・・！」

ほんの一瞬、女王様が国民に笑顔で手を振っている最中、

シロヤと目があつた。

女王様の動きが止まった。

「・・・？」

急にどうしたのかと、一部の国民とシロヤが異変に気づいた。

パレードカーの上の女王様が、大臣と思われる男に何かを言っている。何か急いでいるような雰囲気を出している女王様に、大臣からマイクを渡された。パレードカーが動きを止めた。

「皆の者！今日は私の帰還を祝したパレードを開いてくれたことに感謝する！しかし、今回私が無事に帰ってこれたのは私一人の力ではない！」

女王様はすつとある方向を指差した。その先には、

「そこにいる黒毛の馬に乗った旅人の青年は、私が魔の物に襲われていたところを助けてくれた勇敢なお方だ！ぜひとももてなしてあげてほしい！」

女王様の言葉と同時に、その場にいた国民全員がシロヤとクロトに群がった。

「うわ！ちよつとまつ！うわああ！！！」

国民に持ち上げられ、ベルトコンベアのように城に向かって運ばれるシロヤとクロト。そのまま城の前まで運ばれたシロヤとクロトに、たくさんの食べ物を持った人たちが押し寄せてきた。あつという間にシロヤとクロトの目の前は、たくさんの食べ物で一杯になった。

まだ状況を確認できずに周りをキョロキョロするシロヤと、嬉しそうに食べ物にがつつくクロトに向かって、パレードカーの上の女王様がさらに言葉を続けた。

「パレードが終わったら城に来てほしい。改めて礼を言いたい。」

シロヤは遠くからも見えるように大きく頭を縦に降ったのち、ゆっくりと甘砂まんじゅうに手を伸ばした。

「これ・・・食べられるかな・・・。」

招待

豪華すぎるもてなしを受けたシロヤとクロトは、食べ過ぎでふらふらのまま城に入った。

「うわぁ．．．．」

今までの旅の中で城らしきものに入ったことがなかったシロヤは、あまりに自分の中の世界とかけ離れた空間に驚きを隠しきれないでいた。

何より一番驚きなのは、王室に続くまでの長い廊下に人の列ができているところだ。へいしやメイドや学者など、おそらく城に出入りしている人たちだろう。

「．．．．」

自然と無口になるシロヤ。初めての体験が多すぎて何も言えなくなっていた。

王室の奥には豪華な椅子。そしてそこに座っている女性は、確かに森地帯で助けた女性だ。しかし、服装が昼よりも華やかで豪華になっでいて、本当に女王であることがうかがえる。

「よく来たな。そなたを心から歓迎しよう。」

重みがある声が部屋に響く。ただの歓迎の言葉だけなのに緊張するシロヤ。額から汗が垂れる。

「ところでそなたは何故このバスナダに来たのだ？」

「えっと．．．実はスタンプを集めてまして．．．。」

声が震えるシロヤとは対称的に、口元を緩ませて話すシアン。

「よしわかった。今すぐ黄金のスタンプを作らせよう。」

「いやいやいや！押していただけだけで結構です！」

慌てるシロヤ。

「そなた、バスナダが旅の最後らしいな。このあとはバスナダに住む気か？」

「いえ、目的も果たしましたし帰郷しようかと。」

元々は農民の父親を置いて出たため、旅が終われば少しは親孝行してやるうと思っていたのだ。

「帰郷してからは何をするのだ？ 剣術の指南か？ 官僚に就くのか？」

「いえいえとんでもありません！ 牛や馬と戯れながら親の仕事の手伝いでもしようかと思つてます。」

シアンは顔を少しだけ歪ませた。

「そなたならばもつと上に立つことが出来るのではないか？」

「いえ、自分は農民生まれの農民育ちですから。」

シロヤは愛想笑いで返すのが精一杯だった。シアンが思っているほど自分は優秀な人間ではない、その事を説明するだけなのに、三頭の牛を引くかのような重労働をしたかのような疲労感が襲う。完全に「女王の威圧感」に萎縮してしまつていた。

「ふむ、ならばどうだ？ そなたにぴつたりな役職を用意しよう。」

「え？」

シアンは椅子から立ち上がり、シロヤに近づいた。

「そなたになら私が自信を持つて任せられる役職だ。」

「あ・・・あの・・・自分は城に仕えるなんて自信が・・・。」

しどろもどろのシロヤの顎に手をかけて顔を近づけるシアン。微笑んだまま、シアンはゆっくりと言葉を続けた。

「どうだ・・・？ そなたにしかできぬのだ・・・。」

言葉を失い、口をパクパクさせるシロヤ。

「私の力になつては・・・くれないか・・・？」

心臓が人生最高の高鳴りを繰り返す。出来るならば逃げだしたい。しかし、シロヤは金縛りにあつたかのように動けない。

「・・・女王様。」

急に聞こえた第三者の声。声はシアンの後ろから聞こえた。見てみると、老人が本を開きながら立っていた。シアンは老人の

顔を見たことがある。シアンと共にパレードカーに乗っていた大臣らしき人物だ。シロヤにとっては救世主だった。

「何だリーグ、今日はパレードで何もなければだぞ。」

「そのパレードの最後に演説をしていただこうと思ひましてね・・・何せご帰還祭ですからねえ。」シアンと同じように重みのある声

だが、何かが違う。シアンは、リーグという男に違和感を感じた。

「ならば仕方がない。リーグ！このお方を最上級の客室にご案内して差し上げる。決して失礼の無いようにしろ。」

「御意。」

深々と頭を下げるリーグを背に、シアンは服を直して歩き始めた。すぐさま近くの兵士が回りを固める。

王室が出る間際、シアンはシロヤの方を振り返った。

「今夜じっくり考えてほしい。答えが出るまではこの城に居座るといい。」

優しく微笑んだのち、シアンは王室を出ていった。

「ではご案内しましょう。」

リーグに連れられて、シロヤは奥へと歩いていった。

「ではお連れの馬は私が連れていきましょう。」

振り向くと、銀色の防具をつけた体格のいい兵士がクロトの横にいた。

「では馬はバルーシに任せていきましょう。バルーシよ、くれぐれも失礼の無いようにしろ。」

「御意。」

力強い声と共に、クロトを連れてバルーシは王室を出た。

「では案内しましょう。私についてきてください。」

リーグについていき、シロヤは王室を出た。

「ではこの部屋をお使いください。何かあれば呼び鈴を鳴らしてください。だされば控えの者が来ます。」

「わ、わかりました。わざわざありがとうございます。」

深々と礼をして、レーグは部屋を出た。

広すぎる客室には大きなベッド等の様々な物がある。

急に悲しみが湧いてきたシロヤは、すぐさま呼び鈴に手を伸ばした。

「・・・。」

チリンチリン！

依頼

豪華な空間の中で一人ぼっちになったシロヤは、寂しさのあまり呼び鈴を鳴らした。

すぐさまドアは開いた。立っていたのは、身長がシロヤよりも低いが年は同じぐらいのメイドだった。

「お呼びでしょうか、シロヤ様。」

かしこまった態度にシロヤはまたもや萎縮してしまった。

「ええっと・・・名前は？」

萎縮したあまり出た言葉は、まるでナンパでもしてるかのような質問だった。メイドは一瞬驚いたような表情を見せるが、すぐさま対応してみせた。

「私はシロヤ様専属のメイドに任命された、クピンという者です。至らぬ点があるかもしれませんがよろしくお願いいたします。」

深々と礼をするクピン。シロヤも礼で返す。

「実は砂風呂の準備ができましたので、これからお呼びしようと思っていたのですが、いかがなさいますか？」

砂風呂は、砂漠地帯のバスナダの名物だ。他の砂漠地帯とは違う、特有の成分が入った砂風呂は美肌効果が高いと他国でも噂になるほどだ。もちろん、シロヤはバスナダに来てから砂風呂に入ろうと思っていた。

「じゃあお願いします！」

「ではこちらです、ついてきてください。」

クピンに連れられ、シロヤは城の廊下を歩いた。

その途中、ぶつぶつと呟きながら兵士がシロヤの脇を通った。誰に聞かせるわけでもない声でぶつぶつと呟く兵士。兵士は、さつきクロトを連れていった人、名はバルーシだ。シロヤは、リーグにも感じた違和感を再び覚えた。

一度覚えた違和感はどこまでもついてきた。急に変な緊張を覚えるシロヤ。

緊張を覚えたままのシロヤを、クピンは何も気付かないまま案内する。

「こちらが砂風呂です。では入る前にお背中をお流しします。」

「へっ!？」

さっきまでの違和感が飛んでいった。

「ふう・・・何か無駄に気を使った気がする・・・。」

人から背中を流してもらうなんて初めての経験だったシロヤは、気を休めるどころの話ではなかった。つるつるになった肌が、より冷や汗を倍に感じさせた。

「・・・トイレどこだ？」 冷や汗が尿に変わったのか、急にもよおしてきたシロヤ。場所がわからず、成り行きで部屋の外に出てみる。

長い廊下の先、シロヤの部屋から五つほど離れた部屋のドアに、一人の兵士が立っていた。ドアにぴったりと耳をつけている。どうやら盗み聞きをしているらしい。何か殺気立つてる気がしないでもない。そして周りには誰もいない。

「背に腹は変えられないか・・・。」

流石に後ろから話しかけても斬られはしないだろう。勇気を出して兵士に話しかけてみる。

「あの・・・トイレは・・・。」

兵士はこちらを振り返り、手のひらを開いてシロヤに向ける。「待て」のサインだ。

「・・・・・・・・・・よし。」

兵士はしばらくしたのち、シロヤの腕を掴んで近くの部屋に入った。中はどうやら会議室らしき場所だった。部屋の中にあつたドアを指差す兵士に会釈をし、シロヤはドアを開けて小部屋に入った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふうー!!」

「さつきはすまなかった。どうしても聞きたいことがあったのでな。」

兵士はシロヤに頭を下げる。

「いや、別にいいですよ。こっちは何かすみません。」

今二人がいる場合は、どうやら兵士の休憩室兼作戦会議室らしい。夜も遅いため、二人以外誰もいない。

二人しかいない空間に流れる沈黙。耐えきれなさそうと感じたシロヤは、部屋から出ようとドアに向かって歩きだした。

「ありがとうございます。じゃあおやすみなさ」

「シロヤ様。」

シロヤの言葉を遮るバルーシ。急に顔つきが変わり、口調も重くなる。

「・・・勇敢なシロヤ様になら話せるでしょう。しかし、ここで聞いたことは他言無用でお願いしたい。」

「・・・はい。」

勇敢な、の部分を訂正する前に肯定してしまったシロヤ。バルーシを取り巻く異様な雰囲気、重々しい空気がシロヤをうなずかせた。バルーシはゆっくりと話を続けた。

「この国には、政治を行う”バスナダ七人衆”という機関があります。最近、その機関が不穏な動きをしているという情報が入ったのです。」

シロヤは瞬時に悟った。自分は今、とんでもないことに片足を突っ込んでいるのではないかと。

「こんなこと、他国の者に頼むのも変かもしれませんが、ぜひ我々と調査をしていただきたいのです。」

「いやいや！俺は勇敢でも何でもありませんから！ただの農民です！」

必死に誤解を解くシロヤに向かって、何度も頭を下げるバルーシ。「お願いします！無理矢理なのは百も承知、しかし、女王様の命も

関わっている可能性がある以上、戦士一人の戦力、学者一人の知恵でも必要なのです。」

必死に頭を下げるバルーシに、シロヤはとうとう折れ始めていた。
「いや・・・でも・・・。」

再びしどろもどろになるシロヤ。

「！！！！」

一瞬、バルーシが動いた。背中の剣に手をかけ、闘志を剥き出しにする。

ビククリして後ろを振り替えると、ドアの向こうに気配を感じた。
「中に誰がいるの？」

大人の女性の声だ。それを聞いたバルーシは、戦闘体制を解いてドアを開けた。

疑念

開かれたドアの先にいたのは、ドレスに身を包んだ女性だった。その女性が部屋に入ると、バルーシは胸に拳を当てた。この国の敬礼だ。

「ブルーパ様！夜分遅くに作戦会議室を使つてしまい申し訳ございません！」

女性はバルーシに向かって軽く微笑んだのち、シロヤに近づいた。「あなた、今日シアンに呼ばれてきた旅人の子ね？」

怪しく微笑みながら、女性はさらにシロヤに近づいた。足一つ分くらいの距離まで近づいた女性は、シロヤの顔をジッと見た。

「ふふ、可愛い子ね？私の好みのタイプよ。」

「ここ！ここここ光栄です！」

女性はさらに近づく。シロヤの心臓が再び高鳴る。風呂でクピンに背中を流してもらった時のドキドキとは明らかに違う。女性から感じる香水の香りが、大人の色気を感じさせる。

「ふふふ、うぶな子ね。私があなたを男にしてあげよう、か・し・ら。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えええ！？」

一瞬の沈黙のうち、シロヤの頭が真っ白になった。顔は赤く火照りあがり、頭からは煙が出てるイメージだ。指先と足がカタカタと震える。

女性はシロヤの異変を感じると、笑いながらシロヤの顔に手を当てた。

「うふふ、冗談よ冗談！そんなに堅くならないの！」

笑いながらシロヤの頭を撫でる。撫でながら、女性は後ろのバルーシに目を向けた。

「でも、あなたの嘘は好きじゃないわよ？ね？バルーシ。」

バルーシは口を閉ざした。

「安心しなさい。七人衆の噂は知ってるわ。それに、首謀者の目星ももつついてるわ。」

「それは本当ですか！？ブルーパ様！」

バルーシは身を乗り出した。

女性は頭を撫でていた手を降ろし、三步下がって静かに答えた。

さつきまでの微笑みは消え、真剣な表情と瞳からは、凜々しさと心の強さが感じとれる。

「私の独自の見解なんだけどね。今回の噂にはリーグ大臣が関わっている可能性が高いわ。」

「リーグ大臣がですか！？」

女性から発せられた言葉には、シアンにも感じた特有の重みがあった。そして発せられた言葉の内容に、バルーシとシロヤは目を丸くした。シロヤは大臣と話したことは一回しかないが、不審なことをするような人には見えなかった。

「シロヤ君、人は見た目では判断できないわよ？忠誠心が高い人ほど怪しい、ってこともあるのよ？」

さつきからシロヤの心を読んでいるかのように話す女性。そしてバルーシが敬称をつけて話す女性。彼女は何者なのか、と疑問に思うシロヤ。

「あら、そういえば紹介がまだだったわね。私はブルーパ。バスナダ国の第二女王、シアンの姉ってところかしらね。」

「シアン様の姉・・・？第二女王！？」

その事を聞いた瞬間、シロヤは後ろに飛び退いて気を付けをした。「も！申し訳ありません！第二女王様とは知らずに」

「ああ、気にしなくていいわよ。私も改まれるのは苦手だからね。」シロヤの口に指を当て、言葉を遮るブルーパは、シロヤの頬に手を当てて静かに言った。

「話は聞いたと思うけど、今は私に気を使うよりもシアンを気にか

けてあげて。この噂、下手すればシアンの命すら危うくなるかもしれないの。だから、あなたがシアンを守ってあげて」

「私からもお願いしたい！」

バルーシが頭を下げる。王族の命がかかっているとなると、断るに断れない。

「わ．．．わかりました。出来る限りのことはやってみます。」

シロヤはゆっくり頭を縦に振った。

「ありがとうございます！シロヤ様！」

「本当にありがとう、シロヤ君。シアンのこと、よろしくね。」

バルーシが何度も頭を下げ、ブルーパが再びシロヤの頭を撫でた。

「シロヤ様！どこにいらしていたのですか！？」

部屋の前にいたクピンが、シロヤを見つけて駆け寄った。

「すいません．．．、ちよつと夜風に当たりたくて外に．．．。」

「それならば一言断ってからお願いします。本当に心配したんですからね。」

少し頬を膨らませるクピン。

「そろそろ消灯の時間なので、お部屋に入っていただきます。」

「ああ、もうそんな時間ですか。じゃあ寝させていただきます。」

「そうですか。ではシロヤ様、おやすみなさいませ。」

軽く礼をして、クピンは部屋を出ていった。

再び一人になったシロヤ。しかし、今は一人で頭の中を整理したかった。シロヤは豪華な布団に潜って、さっきあったことを思い返した。

「女王様の命を守る．．．か。」

例えば、長い旅の中でこんなことは一度もなかった。城に呼ばれたり、豪華なおもてなしを受けたり、女王様の命を守る大役を任せられたり。

「俺に．．．務まるのかな．．．。」

ただの農民一族の自分に務まるのか、悪い方向にしか頭が働かな

いシロヤ。

やがて、旅の疲れ、初めてのおもてなしを受けたことでの疲れ、大役を任されたことの疲れで、いつの間にか眠りについてしまった。

起床

朝、爽やかな砂漠の朝日が窓から降り注ぐ。窓の位置が、ちょうど朝日を枕元に降り注がせ、爽やかに目覚めることが出来る。

と、ここまでがリーグから話された部屋の説明だ。しかし、爽やかな朝日はシロヤに降り注いでなかった。

「・・・？」

ゆっくりと目を開けると、窓を誰かが遮っているようだ。遮っている人は、シロヤの頭を撫でながら、顔を真上からずっと見つめていた。

「ん？起きたか？おはよう。」

微笑みを浮かべ、頭を撫でながら、目覚めたシロヤに声をかける。シロヤの頭には、柔らかい枕の感覚があつたが、横を見てみると、昨日使っていた枕が無造作に転がされていた。じゃあ今、自分の頭の下にあるのは何なんだろうか・・・。

まだ状況を理解できないシロヤ。頭の中で出した結論は

「夢・・・か。」

再び目を閉じるが、目覚めてから時間が経ったシロヤは思考が復活していた。

再び目を開けたシロヤは、状況を瞬時に確認した。今、シロヤは頭を撫でながら膝枕をされていた。そして、膝枕をしている人物は「どうした？そんなに見つめられては照れるではないか。」

「・・・シーシアン様！」

シアンは、微笑みながらシロヤを見つめていた。対称的に、シロヤの顔はどんどんと焦りの色が強くなった。

「どうした？私の膝枕を気持ちよくないか？」

「いーいや！そういう訳では！すいません！」

慌ててベッドから飛び降りようとするシロヤを、シアンが体で制止させる。強引に頭を胸に持ってかれるシロヤ。

「そんなに堅くなるな。今は私が王族ということは忘れるがいい。」
「あ……は……はい。」

しばらくシアンに甘えさせられるシロヤ。再びまどろみ始めてきたシロヤは、強引に眠気を押し殺してシアンに話しかけた。

「そういえばシアン様、俺にぴったりの役職っていたい……。」

「おお、話すのを忘れていた。何にせよ、話がわからなければ決断なんて出来ないな。」

シアンは撫でていた手を止め、凜とした瞳でシロヤを見つめながら、ゆっくりと語りだした。

「これは、そなたにしか出来ないことだ。」

「でも……俺は頭が良いわけでもないし、剣の腕が良いわけでも……。」

「そんなことではない。そなたにしかできぬ、そなたにこそ相応しいことだ。」

シアンは一呼吸置いたのち、目を閉じて再び語りかけた。

「そなたには、私のそばにずっといてほしい……。」

「……え!？」

シロヤは驚きの声を上げた。しかし、シアンはそのまま言葉を続けた。微かに頬が赤くなっている。

「私と共に……この国を……支えてはくれぬか。だから……私と……。」

声を次第に籠らせる。言葉を発するのをためらうかのように、シアンは何回も体を揺すった。

「……シアン様？」

シアンは頬をほとんど赤くしていった。一瞬見えたシアンの乙女の姿に、シロヤはドキツとした。

「……女王様。」

急に割り込んできた第三者の声。シロヤはこの声に聞き覚えがあった。昨日の夜中、ブルーパが話していた最も怪しいといわれる人

物だ。

「レーグ！？何故お前がここにいる！？この部屋はクピンが担当しているではないか！」

シアンはシロヤを抱いたまま怒鳴った。よほど、二人きりの空間を邪魔されたことが腹立たしいのだろう。

「そんなに怒らなくても・・・朝食が出来ましたんで呼びしに來ただけですよ。」

レーグは悪そうにいったが、顔は全然悪びれている様子はなかった。むしろ、良いタイミングに來たとでも言わんばかりの表情だ。それが、シアンを怒らせた要因の一つでもあるようだ。

「それならば朝食をここに二人分持つてこい！私はこのお方と二人でいたこう！」

「いやいや、もうローイエ様もブルーパ様もいらしていますので、残りはお二人だけなんですよ。」

女王を怒らせているにも関わらず、全く動じていない。シアンは少しムツとした表情のまま考え込んだ。

「む・・・二人が待っているのならしょうがない・・・。続きは朝食後に話そう。」

シアンはシロヤを静かに離し、早歩きで部屋を出た。そしてそのあとをレーグが追う。

「ではシロヤ様、お早めにいらしてください。ヒヒヒヒ。」

最後の含み笑い、シロヤはレーグに言い様のない寒気と不気味さを感じた。

「・・・。」

ここで考えていてもしょうがないと、シロヤは考えるのをやめて部屋を出た。

その瞬間

「キャッ！」

「うわぁ！」

ドアを開けて部屋を出てすぐ、シロヤは誰かとぶつかった。

ぶつかつた少女は黄色く長い後ろ髪を二つにまとめていた。華やかなドレスに身を包んでいて、背丈はシロヤよりも小さい。感じた感じ、歳もシロヤより下だろう。

「あれ？もしかして・・・シロヤ様！？」

少女はシロヤを見るなり、目を輝かせて近づいた。

「え？そうだけど・・・。」

「わぁ！お姉様を助けてくれたんだよね！」

少女はシロヤに抱きついた。その少女の言葉の中に、シロヤはいち早く気づいた。

「お姉様！？ていうことは君、いやあなたは！？」

「うん！私のお姉様は第一女王様と第二女王様なんだよ！私も第三女王なの〜！」

抱きついたまま少女はシロヤに笑顔で答えた。逆にシロヤはまたもや焦りの顔になる。

「シロヤ様〜！ご飯の時間だから食べにいく〜！」

「う・・・はい。」

シロヤは少女に抱きつかれたまま、朝食の場を目指した。

「そういえば名前言ってなかったね！ローイエっていいま〜す！」

「ローイエ・・・様？」

「様いらないよ〜！」

いつの間にかシロヤの前に来たローイエは、シロヤの胸に顔を埋めた。

予算

ローイエに抱きつかれたまま、シロヤは朝食の場についた。席にはすでにシアンとブルーパが座っていた。そしてシアンの傍らには、怪しい笑みを浮かべるレーグがいた。

「あらあら、二人とも仲良しね。」

まるで母親が子をからかうように笑うブルーパ。対称的にシアンは顔を曇らせ、なんとも言えない視線をシロヤにぶつける。シアンの変な視線に、シロヤは変な汗をかき始めた。

「・・・ハハハ。」

「シロヤお兄様〜!」

シアンの席の隣で朝食を食べる。今までの旅ではお目にかかれなかったような豪華な朝食。慣れない食事で、シロヤは食があまり進まなかった。

「む？食べないのか？そなたは食が細い方とは知らなかったぞ、すまなかった。」

「いえいえいえ！！昨日たくさん食べ過ぎたから食べられないんだと思います！」

王族に謝られるだけで汗びっしょりになるシロヤ。それを見てクスクスと笑うブルーパとローイエ。三人姉妹にとっては久しぶりの男性との食事だ。

「・・・女王様。食事中申し訳ございません。以前の会議後にまとめられた予算案です。目を通しておいってください。」

急に入ってきたレーグに、ブルーパとローイエは一瞬顔を曇らせた。

「む？そうか。見せてもらおう。」

軽く口を拭いて、シアンはレーグから一枚の紙を受けとる。端から端まで紙に目を通したのち、シアンは紙を下ろしてレーグを見た。

紙に隠れていた顔は、怪訝そうな顔だった。

「リーグよ。」

「はい。」

昨日感じた言葉の重みよりもはるかに重い。怒っているような声だ。しかし、リーグは動じていない。

「この予算案はバスナダ七人衆全員の意見を取ったのか？」

「いえいえ、七人衆に通す前に女王様に見せてからの方が票は集まりやすいですから。」

「ならば、今すぐにこの予算案を書き直せ。この予算案は却下だ。」
紙をリーグに叩き返すシアン。

「何故です？どこにも問題はないはずでは？」

「問題点の一つだ。この国にそれだけの軍事費用はいらない。」

リーグは紙をしまつて、シアンに問い詰める。

「何故です！？他国が攻めこんできた事を考えれば、例年の軍事予算よりも倍以上の予算が必要なのですぞ！」

「世界は今平和だ。他国が侵略目当てに攻めこむことなどない。武器はあるから使ってしまうのだ。この国を武装国家にしてはならないためにも、軍事予算は微々たるものでよいのだ。」

リーグの言い分も分かるが、シアンの意見も全うだ。何より国民はシアンの意見を選ぶだろう。

現にこの国には、他国に敵視されるような要素がないため、いたって平和である。シアンの意見は、平和なこの国、そしてこの国に暮らす人々のための意見なのだろう。

しかし、リーグは食い下がる様子を見せなかった。

「しかし！これからどのような事件が起こるか分かりません！何にしろ武装しておくに越したことは！」

たかが大臣が、こうまで女王に食いかかってくるだろうか、シロヤは疑問に思った。それを読んだかのように、ブルーパはシロヤに視線を送る。これが、リーグが怪しいと言った要因、王族しかわからない要因なのだろう。

「とにかくこの予算案は却下だ。朝食後に七人衆を集めて会議を行おう。」

シアンは席を立ち、リーグを連れて部屋を出ようとした。
「すまない・・・夜にもう一度話そう。」

シロヤに一瞬語りかけ、シアンとリーグは部屋をあとにした。

「また予算案却下されたね。しかもこの間と同じ理由で。」

「リーグも懲りないわね。シアンが軍事予算拡張に頷くわけがないのに。」

ブルーパとローイエは同時にため息をついた。だんだんシロヤの中で、リーグが怪しい人物になっていった。

重い空気の朝食の場、誰もしゃべらない中、ローイエが口を開いた。

「シロヤお兄様！今日私と一緒に町を散歩しませんか？案内しますよー！」

「あら面白そうね。私も一緒に行こうかしら。」

元々今日は町を探索する予定だったシロヤ。

「はい、じゃあ・・・一緒にお願ひします。」

「うわあゝい！三人でお散歩〜！」

両手を上げて喜ぶローイエ、その横ではブルーパが心配そうなシロヤを見つめる。そつとシロヤに近づいて、ブルーパは耳元で小さく話しかけた。

「ね？怪しい理由がわかったでしょ？」

「だけど・・・。」

「そうね、また断定するには証拠が不十分すぎるわ。会議での調査はブルーシと他の兵士達に任せておきましょう。」

ブルーシなら任せられると言った感じのブルーパ。シロヤは一つの疑問を覚えた。

「あの・・・ブルーシさんの役職って・・・？」

「ブルーシはこの国の兵士団長なの。」

なるほど、兵士団長なら信頼も厚いと、シロヤは頭の中で完結させた。

「お姉様、何話してるの？」

「いえ、ロイーエには関係無い大人の話よ。」

「うゝ！私も大人だもゝん！」

「大人なら好き嫌いしないで何でも食べなさい。」

「ごちそうさまでしたゝ！」

ロイーエは席を立って、小走りで部屋を出た。

散策

朝食後、シロヤは身支度を済ませる。王族と一緒に街散策など考えてもみなかつたため、楽しみと緊張で変な顔になる。

「落ち着け・・・俺、落ち着け・・・。」

そうだ、別に何かするわけでもないんだ。ただ一緒に散歩するだけだ。シロヤは頭の中で必死に自分に言い聞かせる。

「シロヤお兄様！準備できたよ！」

ドアを開けて、ロイーエとブルーパが入ってきた。さっきまでのドレスから一転、ロイーエは外出用の地味な服に身を包んでいる。

一方ブルーパは、外出用にしては立派なドレス姿だった。

「あの・・・ブルーパ様？ドレスで外に出られるんですか？」　ブルーパは微笑みながらシロヤの頬に手を添えた。

「女はいつだっておしゃれしたいのよ。特に男性と歩くときなんかには・・・ね。」

ブルーパは軽くウインクをした。

「じゃあシロヤお兄様！行きましょ！」

「うわぁ！ロイーエ様！」

ロイーエはシロヤの腕にがっしりと抱きついた。そんな二人の様子に微笑みながら先に行くブルーパ。

「もう！様つけないでよ！」

「改めて見ると、大きい城だな！」

シロヤは後ろにそびえる城を見上げた。昨日、自分はここに泊まっていたのが嘘のようだった。

「シロヤ君、君の相棒が待ってるわよ。」

城に見とれているシロヤの後ろには、昨日バルーシが連れていったクロトの姿があった。

「クロト！何だか久しぶりに感じるよ！」

クロトに抱きつくシロヤ。クロトは何事かと首をかしげた。しかしシロヤはお構い無しに抱きついた。

「よしクロト、街散策に行くぞ。」

クロトに乗るシロヤ。

「シロヤお兄様、私もクロト様に乗りたい！」

キラキラした笑顔で懇願するロイーエに、クロトは「任せておけ！」と言わんばかりにしゃがみこむ。

ロイーエがシロヤの後ろに乗ったのを確認したクロトは、再び立ち上がって歩きだした。

「ふふ、ご主人様と同じで可愛い馬ね。」

歩くクロトの隣で、ブルーパが微笑んだ。

「あ！昨日女王様が言ってたシロヤ様じゃないか！？」

「その後ろつてロイーエ様じゃない！？」

「ブルーパ様も一緒だ！」

街に入ったとたん、国民が三人を見てざわめいた。当然だ、女王二人と昨日のパレードでの注目的になったの人が一緒に歩いているのだ。

「ふふ、シロヤ君もすっかり街の人気者ね。」

ブルーパがシロヤに言った。今までの旅で注目を集めたと言ったら、クロトが露店の売り物を勝手に食べた時くらいだった。今までとは注目のされ方が違うため、シロヤはまだ慣れないでいた。

「ああ！あっちから砂胡椒のいい匂いがするよー！」

ロイーエが一つの露店を指差した。すると、クロトがその露店へと歩くコースをチェンジした。

「うわぁクロト！どこ行くんだよ？」

クロトにとつては周りの扱いとかは関係が無い。ただ求めるのは「美味しいもの」だけだ。

ロイーエの話を聞いて、「あの露店には美味しいものがある」と

認識して、勝手にルートをチェンジしたのだ。

「まったく・・・しょうがないな、クロトは。」

このぐらいなら普段の旅でもよくあることだ。シロヤは諦め、砂胡椒でこんがり焼かれた砂豚のステーキの露店に導かれた。

「おじさん！砂豚のステーキください！」

「へ！へい！女王様とシロヤ様のために最上の物をご用意いたします！」

すぐさま露店のおじさんが調理にとりかかる。

テンションが上がっているロイエとクロトの横で、ブルーパは小さくおじさんに呟いた。

「私はいらないわ、これ以上・・・増やしたくないから。」

内容が聞こえたシロヤは、とぼけたように聞いた。

「ブルーパ様、気にしてるんですか？体」

ガスッ！

「いてえ！」

足を思いつき殴られるシロヤ。殴ったブルーパの顔は笑顔だったが、変な威圧感があった。

「女性のトップシークレットよ？シ・ロ・ヤ・く・ん。」

今まで以上の寒気と冷や汗がシロヤを襲った。

「ここが観光名所のバスナダ砂丘ですか・・・。」

街を離れて、シロヤ達は街外れの砂丘までやって来た。見渡す限りの砂丘。広大な砂漠は、目印が無ければ迷ってしまいそうなくらい広い。それでいて、砂漠は穏やかだった。

「昔はね、この国は争い事が絶えなかった国だったのよ。」

ブルーパが静かに語った。シロヤは、ブルーパから放たれている不思議な感覚に魅了され、話に聞き入る。

「今でこそこんな何もない穏やかな砂漠だけど、こうなったのは何人も犠牲があったからなのよ。」

「犠牲？」

「そうよ。今も砂漠にはたくさんの人が眠ってるの。多分、その人たちもこの砂漠の姿がずっと続くことを祈ってるんじゃないかしら。」

シロヤは、朝食の時のシアンの意見が正義のような気がしてきた。眠っている人たちは、この国が争うことのみを目的に武器を持つことを望んではないのだろうか。そう思うと、レーグの意見が何だか腹立たしく思えてきた。

「だから・・・ね。シロヤ君が決断してくれたことで、この国の人はずっと笑顔でいられるかもしれないのよ。」

決断が正しかったのか。ということは夜中に何度も悩んだ。しかし、ブルーパの話を聞いて、自分の中で踏み切りがついてきた。

「ふふ、良い顔してるわよ。シロヤ君。」

微笑みながらブルーパはウィンクをした。

「クロト様！美味しいね〜！」

二人の横では、ロイーエとクロトが露店で買った肉を食べてる。

難しい話よりも美味しいものの方がいいらしい。

「気楽な子達ね。国が動くかもしれないって言うのに。」

自然と笑いが込み上げてくる二人。いつの間にか、二人も深く考えるのをやめていた。

シロヤは笑いながら周りを見渡した。

「アハハハハ・・・ハ・・・。」

シロヤは笑いを止めた。見渡す限りの砂漠、点々とある砂丘の目印以外、何もなかったはずだった。もちろん、人影なんてものは存在してなかった。

ふと視界に一瞬見えた人影、それをシロヤは見逃さなかった。

「あれは・・・まさか！」

シロヤは駆け出した。思考よりも体が先に動いた。シロヤが駆けつけていった先、大きな砂丘に遮られて見えなかった先には、砂漠とはかけ離れた森地帯が広がっていた。

そしてその先、森地帯に入ろうとしている人物。森地帯に入るにはあまりにもかけ離れた服装だ。

間違いない。朝、シアンに食ってかかった人物だ。遅れてきたプルーパも人物を確認する。

「あれって・・・。」

「ええ、間違いないわ!」

二人は森地帯に入ろうとしている男

リーグ大臣の姿を確認

した。

追跡

森地帯に入っていくレーグを確認したシロヤとブルーパは、目を見合わせた。

「明らかにおかしいわ・・・大臣が森地帯に一人で入るなんて。」

「それに・・・入る前に周りを確認してました。人目を気にしているんでしょうか？」

レーグは明らかに挙動不審だった。森地帯に自分が入ることを他人に知られたくないのだろうか。

考えている二人に、後ろから二人を呼ぶ声が聞こえた。

「シロヤ様～！ブルーパ様～！」

声の主が後ろから走ってくる。声の主はバルーシだった。慌てたような表情で、顔を汗だくにしていた。

「バルーシ！まさかあなた、レーグを追って？」

「はい！会議が終わると同時に、誰にも言わず護衛も無しに城を出ていきました。」

どうやらレーグは、自分の行動を人に知られないように徹底している。不審な動き、怪しい噂には、レーグが何かしら関わっている可能性が非常に高いと三人は踏んだ。しかし、まだ証拠は不十分だ。「バルーシさん、俺、レーグを追ってみます。」

口を開いたのはシロヤだった。バルーシは慌ててシロヤを止める。

「無茶だ！この先は未開拓地帯だ！何が出てくるかわからないぞ！」

「でも怪しいなら確かめるべきです！どんなに危険でも行ってみましょう！」

バルーシを説得するシロヤ。その瞳には熱意が秘められていた。

その熱意が伝わったのか、ブルーパが一歩前に出た。

「私もシロヤ君の意見に賛成よ。今動かなければ解決なんて程遠いわ。」

二人の熱意に押され、バルーシは唸りながら頭を縦に振った。

「ん？バルーシいつ来たの？」

バルーシの後ろから、食事を終えたロイーエとクロトがのんきにやって来た。

「ロイーエ、今からシロヤ君と行かなきゃいけない所があるの。」

「だからクロト、ロイーエ様と城に帰っていてくれ。」

ロイーエは不満そうな顔をし、クロトはシロヤを心配するような瞳で見つめる。おそらく今から危険な所に行くのだらうと、直感で感じ取ったのだらう。

「大丈夫だ！ブルーパ様に何かあつたら俺が守ります！」 シロヤは肩の剣に手をかけて強気で言った。

「・・・シロヤ様がそこまで言うなら大丈夫かな？」

「シロヤ様を信じよう。シロヤ様とブルーパ様なら大丈夫だ。」
バルーシはロイーエを励ますように言葉をかける。

それで安心したのか、ロイーエは静かに首を縦に振った。

「ありがとう、ロイーエ。」

笑顔のロイーエの頭を撫でるブルーパ。

「ブルーパ様、行きましょう。」

森地帯に入っていくシロヤとブルーパを、ロイーエとクロトは心配そうに見つめていた。

未開拓地帯は、国境近くの森地帯とは格が違っていた。国境近くの森地帯はまだ整備がされていたが、未開拓地帯はその名の通り何も手がつけられていなかった。

大きな岩や見たことない植物が入り乱れる道を歩く二人。

「こんな先に・・・何があるんでしょうか？」

「レーグのことだからろくなものじゃないわよ。」

緊張するシロヤとは対称的に、まるで慣れたように道を進むブルーパ。ほとんど二人の差は離れていった。負けじと気合いで追いかけるシロヤ。

ふと、ブルーパが歩くのを止めた。何事かとシロヤは近づいてプ

ルーパに訪ねる。

「ブルーパ様？何かあつたんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・来る！」

ブルーパが今まで見たことないようなオーラを放った瞬間、木々が意思を持ったように動き出した。木の枝が伸び、今にも二人を貫かんばかりの勢いで動き回る！

「う！うわあ！」

シロヤは尻餅をついた。今までの旅で見たことない相手だ。肩から剣を抜くが、剣を持つ手はカタカタと震え上がる。

一本の枝がシロヤめがけて伸びる！

「うわああああ！」

シロヤはかろうじて受けたものの、今まで感じたことのない力に、全身が震え上がるほどの恐怖が襲いかかる。

それを狙うかのように、シロヤを狙って再び枝が伸びる。シロヤは思わず目を閉じた。

「・・・・・・・・？」

訪れない痛み。シロヤは目を開けて目の前を確認する。

枝は自分の目の前で止まっていた。そして枝には、三本の短剣が刺さっていた。

「シロヤ君！大丈夫？」 シロヤの横にいたブルーパは、切っ先が眩しいくらいに光輝く短剣を両手に持っていた。持っている短剣と、枝に刺さっている短剣が同じなのを見ると、どうやらシロヤを助けたのはブルーパのようだ。

「シロヤ君、今すぐ下がって。」

凜とした声に押され、シロヤは後ろに下がった。

ブルーパはシロヤの位置を確認すると、シロヤに向かってウィンクをした。シロヤには今のウィンクが、「安心してね」と言っているように見えた。

動き回る枝と向かい合うブルーパ。しばらく向かい合ったのち、ブルーパが先に動いた。

「・・・？」

ブルーパの動きは、戦士のような動きではなかった。言うなれば、踊り子の踊りだ。まるで舞踊のように華麗に舞うブルーパ。舞いながら、向かってくる枝を華麗に避けている。

そして一瞬見えた隙、ほんの一瞬の内に、ブルーパは動き回る枝の奥、木々の本体を狙った。

精霊

ブルーパが放った短剣は、枝の本体に直撃した。

その瞬間、枝が苦しむように暴れまわった。周りの木々をなぎ倒すかのように、枝は木の幹にぶつかっては落ちていった。

ブルーパとシロヤは、枝を何とか避けながら先に進もうと走る。

「・・・！」

先に走るブルーパを追うシロヤ。暴れまわる枝の本体の横を走り抜けようとした瞬間、シロヤは森の先に人の姿を見た。

奇妙な人だ。羽衣のように透き通ったドレスに身を包んだ少女。最大の特徴は、頭の上には綺麗で大きな花があり、少女の肌が森のように綺麗な緑色だということだ。

少女は走り抜けるシロヤを見つめていた。そして少女の姿を確認したシロヤ。二人の目が合った瞬間、少女に向かって暴れまわる枝が襲いかかった！

「あ！危ない！」

シロヤは叫ぶと同時に逆走した。自分の命が危ないと思ったのは、少女に向かって走り出してからだった。

「シロヤ君！？」

異変に気づいたブルーパが後ろを確認して叫んだ。

枝は高速で少女に向かって伸びる。シロヤも全力だが、枝の方が速かった。間に合わないと思ったシロヤは、我が身を弾丸にするように頭から飛び込む。全力で地面を蹴って少女に手を差し伸べる。

瞬間、枝は少女がいた先の木を幹を貫いた！

「シロヤ・・・君？」

ブルーパは走って確認に向かった。

「いてて・・・。」

シロヤは枝を交わして、少女を胸に抱いたまま倒れていた。

ほつと胸を撫で下ろすブルーパだったが、直後、さらに枝がシロヤと少女に向かって伸びた。

「シロヤ君！危ない！」

倒れたまま動かないシロヤに伸びる枝。ブルーパが短剣を構えた直後、枝はその動きを止めた。

見ると、少女が枝に手を伸ばしていた。まるで少女の言うことを聞いているかのように、枝は少女の前で止まっていた。

「あなた少し・・・おいたが過ぎたわよ？」

少女の手の先が淡く光つたと同時に、枝、そして枝の本体の木が瞬時に枯れ、腐り落ちていった。

「いてて・・・何があつたんだ？」

起き上がったシロヤは、腐り落ちた枝を見て呟いた。腕を押さえているシロヤに、少女はやさしく声をかけた。

「私を守ってくれてありがとうね。おかげで助かったわ。」

少女はシロヤの腕を軽く触る。走ってシロヤの元にやって来たブルーパが、少女に声をかけた。

「あなたもしかして・・・精霊？」

「ええ、そうよ。私を助けてくれるなんて物好きな人ね。」

少女は軽く笑ってシロヤを見つめた。

「精霊？普段は姿を隠していて人間には見えないって聞いていたけど・・・？」

「この辺は人の通りが少ないし、姿隠すのって結構疲れるのよね。」

少女はクスツと笑ったのち、思い出したように呟いた。

「でも最近、変な男がよくここを通るのよね。なんか呟きながら奥の方に進んでいってるわよ。」

「怪しい男！？その男、どこに向かってるかわかる？」

ブルーパは食いかかるように少女に迫った。おそらく、怪しい男というのはレーグのことだろう。

「わかるわよ？行きたいんだったら案内するわよ？」

「本当に！？じゃあお願いします！」

シロヤは少女に頭を下げた。その瞬間、腕に激痛が走った。さつき少女を助けたとき、腕から着地してしまったため小枝が刺さってしまったのだろう。

「あなた・・・怪我してるわよ？まずはその怪我を治してあげるわ。」

「そう言くと、少女の目線の先、森の奥から透き通るドレスに身を包んだ少女がやってきた。前髪で目が隠れていて、助けた少女よりも肌の色が薄い。森のような深い色ではなく、草木のように淡い緑色だった。」

「ああキリミド、ちょうどよかったわ。この人の腕を治してあげて。」

「そう言くと、少女はシロヤの腕に手をかざした。少女の手の先が淡く光ると、シロヤの腕から痛みが無くなっていった。光が完全に消えると同時に、シロヤの腕は正常に動くようになった。」

「治りましたがあんまり無理はしないでくださいね。」

少女はシロヤの腕を撫でた。

「わかった、ありがとう。」

「じゃあ行くわよ。キリミド、あんたも来なさい。」

少女二人を前にして、シロヤとブルーパは森の奥を目指した。

「ああ、紹介がまだだったわね。私はフカミ、よろしくね。」

「えっと・・・私はキリミドっていいいます。姉を助けていただきありがとうございます。」

「ええ！二人つて姉妹なの？」

「別に珍しくないわよ。精霊にだって兄弟姉妹はいるものよ。」

驚くシロヤに、フカミとキリミドはクスクスと笑った。

「見えたわよ。あれが怪しい男が毎回来ている場所よ。」

森の奥深く、太陽の光が届かない暗い森の中に、大きな教会が建っていた。

教会

森にたたずむ教会は、長い間使われていないのか、朽ち果ててしまっていた。あちこちの壁や窓は砕けていて、さらに壁には蔦が大量に付着していた。

「こんなところにレーグ大臣が・・・？」

シロヤは教会を再び見た。対してブルーパは、教会の壁を触りながら呟いた。

「ここ、バスナダ国が昔、軍事国家として発展していた時の名残のようね。森地帯の植物を兵器に変える儀式をしに来ていたと言われていた場所よ。噂には聞いていたけど、本当にあるなんてね・・・。」

「

「昔って言ったら・・・汚染植物を人工的に生産していた時代ね？あの時にこの森を使われたから、さっきみたいな子が出来たのね。」

ブルーパに続いて、フカミが呟いた。

さっきみたいな子と言うのは、シロヤたちを襲ったあの木の事だろう。

「バスナダ国が軍事国家・・・？汚染植物・・・？」

「信じられないと思うけどね。先代のバスナダ国王は就任と同時にこの国の軍事予算を10倍にしたのよ。」

「10倍！？」

シロヤは目を丸くした。今のこの平和なバスナダ国を見ると、とても軍事国家として成り立っていたとは思えなかった。

「それで、バスナダ国特有の植物を兵器に変える計画を実行しようとしたの。この教会はその計画の名残ね。昔はここで植物兵器を作っていたのよ。」

「！！！！何か来る、隠れて。」

キリミドがブルーパとシロヤを引っ張る。四人は、近くの茂みに身を隠した。

しばらくしたのち、教会から男が一人出てきた。

「あれは……。」

「間違いないわ、レーグね。」

レーグは教会を見上げて、何かを呟き始めた。シロヤは聞き取ろうとしたが、距離が遠く、草木のざわめきがレーグの声をかき消して、こつちまで届かない。

しばらく呟いたのち、レーグは来た道に戻っていった。

「よし、入るなら今よ。行きましょう。」

先陣を切ってブルーパが教会に入り込む。遅れてシロヤ、フカミ、キリミドが入っていった。

中は外よりも朽ち果てていた。椅子はボロボロ、わずかな光すら届かない真つ暗な空間。奥に見える微かな光は、どうやら蠟燭の火のようだった。

「レーグがここに来た目的は何なんだろう……。」

「さあね。古臭い奴だと思ってたけど、まさか先人たちの知恵でも借りに来ているのかしら。」

かつてここでは、軍事的植物兵器を作っていたという。しかし、表面上はただの教会なため、蠟燭の火以外には何も無い。

ふとシロヤは、足下の何かに目をやった。

「……これって、蔓？」

「それが汚染植物の一部よ。」

汚染植物、さつきもフカミが言っていたが、シロヤには理解できなかった。

ブルーパは、シロヤの理解できない思考を読み取って言葉を続けた。

「ああ説明してなかったわね。植物兵器は完成しなかったんだけどね、その代わりに無差別に人を襲う植物が生まれたのよ。それをこの国では”汚染植物”って読んでいるのよ。」

さつき二人を襲った木。フカミはあれが汚染植物だと言っていた。

つまりあれが、軍事国家だったときの名残なのだろう。

「やっぱりリーグの目的は・・・汚染植物なんじゃないか？」

「わからないわ・・・ただ、旧バスナダ国家の”何か”が目的なのは確かね。」

ブルーパは首をかしげた。それと同時に、朝の予算での会話が脳裏をよぎった。

「軍事予算の拡張・・・まさか旧バスナダ国家の・・・？」

「有り得るわね・・・それなら朝の予算の話と合点がいくわ。」

「ヒヒヒヒヒ！」

「！！！！！！！」

シロヤ達は一斉に後ろを振り向いた！入り口には、含み笑いをしながら四人を見つめるリーグがいた。

「尾行調査なんて古いことが好きなのですね、ヒヒヒヒヒ。」

人を小馬鹿にするように含み笑いをするリーグ。

「それはお互い様じゃない？過去の国の汚点を復活させようなんて大魔王にでもなったつもりかしら？」

「ヒヒヒヒヒ、私なりの野望のためなんですよ。まあ、あなた達には関係ないんですがね。ヒヒヒヒヒ。」

含み笑いを何度も続けるリーグ。

「野望って・・・？」

「よそ者の旅人風情には関係ありませんよ。まあ敢えて言うなら・・・権力を絶対的なものにしたい、ですかね。」

それを聞いた瞬間、ブルーパは叫んだ。

「あなたまさか・・・”星”が目的！？」

しかしリーグは不動。しばらくしたのち、リーグの姿はなかった。やられたわ！今のはホログラムよ！今すぐ城に戻るわよ！

ブルーパが血相を変えて走り出した！シロヤは訳もわからずブルーパに着いていく。

突然、後からついてきたフカミとキリミドが、走るのを止めた。

「お急ぎみたいね。キリミド！森の入り口まで送ってあげるわよ。」

「はい！」 フカミとキリミドが手をかざすと、周りの木の枝がシロヤとブルーパを持ち上げた。そのまま高速で枝が入り口の方まで移動した。

「二人ともありがとうね！今度甘砂まんじゅうでも持ってくるわ！」

「じゃあ俺は砂豚でも持ってくるよ！」

去り行く二人を見ながら、フカミは呟いた。

「遠慮するわ、私ベジタリアンだから。」

流星

フカミとキリミドの力で森地帯を抜けた二人は、すぐさま城に向かって走った。

「まずいわ・・・」星が狙われるなんて・・・。」

ブルーパが呟いた。しかし、シロヤには”星”が何なのかわからなかった。

「ブルーパ様！」星”っていったい!?”」

「シロヤ君！今は走ることにだけに集中しなさい！」

シロヤを一喝する。その顔には焦りが現れていた。

目的地に向かって城内を走る二人。途中、使用人や学者がブルーパの顔を見て驚いていた。おそらく、ブルーパがここまで焦った表情をしたのは初めてなのだろう。

そして、ブルーパとシロヤが着いたのは、地下への階段を下っていった先にあった門だった。

「シロヤ君・・・ここにレーグの目的があるのよ。この国では”星”って呼んでる物よ。」

門がゆっくりと開かれた。様々な財宝が箱に入れられて管理されている宝物庫。その先にあったのが、ブルーパが言う”星”だ。

「これが”星”・・・綺麗・・・。」

キラキラとまるで宝石のように輝くそれは、それ自体が光を放っていて、薄暗い宝物庫を照らしていた。

「百年に一度、星の形の砂金がバスタダに現れるの。私達はその現象を”流星”と呼んでいるわ。そしてその流星によって生まれる砂、それが”星”よ。国王のみが所有できる国の宝、つまり今の所有者はシアンってこと。」

嚴重に管理されている星は、見ているだけで不思議な力が沸いてきた。まるで、星自体が不思議な力を秘めているようだ。

「気づいた？星に秘められた力に。」

シロヤの心を読んだブルーパは、再び説明を始めた。

「この星がこうやって嚴重に管理されているのかわかる？」

「え……？」

「この星はね……危険なのよ。」

「危険……？」

シロヤは首をかしげた。これだけ光輝く星が危険な理由が思い浮かばなかった。

「この星には魔力を増幅させる力が込められてるの。簡単に言えば、持っているだけでその人の強さを増幅させるのよ。賢者が持てば国一つを自由に作り替えることが出来るくらいに強力なの。」

星に秘められた力、シロヤはそれを知ったと同時に、光輝く星が恐ろしく見えた。

「リーグはこれを使って絶対的権力を手にしようとしているのね。」

リーグの魔力なら国を作り替えはできないけど、頂点に立つことぐらいなら出来るはずよ。」

「でもこれの所有者はシアン様じゃ……。」

「そのために”あの人”を送ったのよ。」

「あの人……？」

シロヤが再び疑問に思った瞬間、宝物庫の扉が開いた！

「ブルーパお姉様！リーグ様が来ました！是非ご挨拶をしたいと思います。」

「あら、ずいぶん突然ね。ちょうどいいわ、シロヤ君にも紹介しなくちゃ。」

宝物庫を出て、客室に向かう二人。

「あの……リーグン様って？」

「リーグの息子よ。」

それを聞いた瞬間、シロヤは顔をしかめた。あんな親を持った子供はろくなものではないような気がしたからである。きつと、金に

物を言わせて市民達を弄んでふんぞり返ってるボンボン息子なんだろうな、とシロヤは瞬時に悟った。

そんなシロヤを見て、クスクスと笑いながらブルーパは客室の扉を開けた。

「ブルーパ様！お久しぶりです！」

客室の中にいた青年が深々とブルーパに礼をする。そして、シロヤに目を向けて再び深々と礼をする。

「お話はうかがっております。シアン様の命を助けた勇敢な方だと聞きました。是非、旅の話なども聞かせていただきたい。」

「え・・・はあ・・・。」

シロヤは目を丸くした。これがリーグの息子なのか、まるで正反對、端正な顔立ちでいて端正な服に身を包んだ青年。リーグのように何かを企むような口調とはかけ離れていて、淀みのないまっすぐな瞳は、意思の強さを感じ取れた。

「よく来たな、リーグン。」

遅れてシアンが客間にやって来る。それを見るなりリーグンは再び礼をした。

「お久しぶりです、シアン様。長らく顔を見せずに申し訳ありません。文を書こうにも時間がとれずに・・・。」

「萎縮するな、そなたはいずれこの国を支えるのだからな。」

シアンはリーグンを微笑みながら見つめた。

「・・・女王様。」

急に後ろから聞こえた声、客間の入り口には、さっきまで追っていた男、リーグが立っていた。

「リーグよ、先程はどこにいたのだ？会議が終わると同時に城を出たようだが。」

「いえいえ、他国からの使者と話をつけてきただけです。ヒヒヒヒ。」

リーグは平気で嘘をついた。

「それでリーグンよ、なぜ急に來たのだ？」

「ヒヒヒヒヒ、女王様。そろそろお決めになられてはいかがですか？」

リーグが再び含み笑いをしながら言った。対してシアンは笑わずにリーグをまっすぐ見据えて口を開こうとした。

「父上、今日はその話をするためにここに来たのでしょうか？ならば僕の意味は初めから決まっています！」

リーグンは、口調を強くしてリーグに言い放った。

「シアン様との結婚は正式にお断りさせていただきます！」

計画

「どういうことだリーグン!?」

「言葉通りの意味です。シアン様と結婚はできません。」
その場にいる全員が目を丸くした。

「元々は父上が勝手に決めた政略結婚、シアン様にも相手を選ぶ権利があるでしょう。」

「ならぬ!リーグンよ、今の発言を取り消すのだ!」

「父上・・・何故そこまでシアン様との結婚を強要するのですか?」
レーグは口を閉ざした。一瞬ボ口を出しかけたが、そのまた一瞬で思い止まったのだ。

「まあリーグンよ、先のことなど気にするな。そなたもゆっくり考えるがよい。今夜は城に泊まるがよい。」

シアンはクピンを呼び出し、リーグンを客室から違う部屋に向かわせた。それに合わせて、その場にいた全員が部屋を出た。

「あれが・・・本当にレーグの息子なんですか?」

「ふふ、びつくりした?」

イメージとはかけ離れた青年、そしてシアンのことを考えての結婚拒否。できた人だな、とシロヤは思った。

「レーグの狙いは我が息子を王族にして星を手に入れることよ。」

「なるほど・・・それでレーグは結婚を強要したんですね。」

しかしリーグンはそれを拒否した。これはレーグにとって計算外なのだろう。

「でも・・・この計算外が変な方向に行かなきゃいいけど・・・。」
ブルーパはそつと呟いた。

「シロヤ様、リーグン様がお呼びです。」

突然、クピンが部屋に入ってきた。

「え？リーゲン様が？」 シロヤがドアの方を振り向いた。そこにいたのはクピン、そして

「いえ、お話があるのはこちらです。私が出向くのが礼儀です。」

クピンの横からリーゲンが現れた。シロヤとブルーパの真向かいにある椅子に座るリーゲン。座り方も非常に綺麗だ。

「リーゲン様、それでお話って言うのは・・・。」

「あなた達もご存知でしょうが、父上のことです。」

さっきまで見せていた顔から一転、表情が引き締まる。それに合わせて、シロヤとブルーパも表情が引き締まった。

「父上の目的は星を使つてのこの国の支配です。そして、旧バスナダ国王が作り上げた汚点、最強の軍事国家の形成です。」

「それに関わっているのが、バスナダ七人衆・・・？」

「はい、彼らの間では旧バスナダ国の世界的通称を取って付けた名、砂の竜王計画”と呼ばれています。」

砂の竜王、シロヤはこの名前を聞いたことがあった。前に旅した国で聞いた噂、バスナダに眠るとされている砂に住む巨大な竜王。

一度逆鱗に触れれば、国全てが紅く地に染まるとされていると。

「砂の竜王って・・・旧バスナダ国家の事だったんだ。」

「国民が思い出したいくない、過去に実際にあつた最大の汚点です。」 シロヤは背中に冷たいものを感じた。

「私の父上はその時代にバスナダ七人衆として政治に携わっていました。そして、旧バスナダ国王が暗殺された事件から大臣になったのです。」

「レーグは懐かしき時代を取り戻そうとしてるのね。迷惑な話だね。」

ブルーパは首を振った。

「シロヤ様！ブルーパ様！」

慌ただしく入ってきたのはブルーシだった。顔を汗で濡らして、肩で激しく息をしていた。

「リーグとバスナダ七人衆が会合を始めました！場所は作戦会議室、今、リーグ側の兵士が前を警備していて情報がとれない状態です！」

シロヤ、ブルーパ、リーグンが一斉に席を立った。

「会合・・・？いったい何の会合を？」

「おそらく、リーグン様が結婚を断ったから何かまた作戦を考えているのでしょうか。懲りない奴等ね。」

「しかし・・・、父上は予備策は常に持っておいているはずですよ！」
「どうにかして少しでも情報が取れればいいのだが・・・。」

四人は黙りこんだ。確かに情報は欲しいところだが、得る術が見当たらない。せめて警備がいなければ、先に作戦会議室に入っていれば・・・、せめてという言葉がシロヤの頭の中を埋めた。

「せめて・・・少しでも近づけられれば・・・。」

シロヤがそう呟いた瞬間、バルーシとブルーパが手を叩いた。

「あるわ・・・リーグ達に気づかれないうで会合を盗み聞きできる方法。」

「しかしそれには・・・」あの方”の力が必要ですね。」

「そうね・・・まあ私が説得してみるわ。」

二人はとある人物を思い浮かべて、深くため息をついた。

「あの・・・」あの方”というのは・・・。」

「ん？めんどくさい男よ。これから何かとお世話になるだろうから、シロヤ君にも紹介しとこうかしら。」

ブルーパはシロヤの顔を見て、にっこり笑った。

「シロヤ君、何か言われても軽く受け流すのよ。一回付き合つと非常に・・・めんどくさいから。」

まるで何かを言おうとしているかのような笑顔に、シロヤは変な違和感を感じた。

「じゃあブルーパ様、倉からあれを出しておきましょうか？」

「ええ、お願いするわ。少しでも勝率を上げておかないとね。」

しばらくしてバルーシが持ってきたのは、シロヤにとっては異臭

と感_じる刺_し激_{げき}臭_{くさ}を放_はつ物_ぶ体_{てい}だ_った_。

大地

シロヤ達がやって来たのは、城の奥の兵士の詰め所だった。

「では・・・開けますよ。」

一拍置いたのち、バルーシはドアを開けた。途端に流れてくる異臭。

「うう！」

思わず鼻をつまむシロヤ。詰め所の中は異臭しかなかった。そんながらんだような詰め所の奥に、シロヤは動く影が見えた。

「ウツク！なんだなんだ！揃いも揃ってウツク。」

樽にもたれ掛かっている男がいた。ゆっくりと立ち上がって近づいてくるが、その足はおぼつかない。ふらふらと近づいてドア付近に再びもたれ掛かる。

「ん？なんだお前！？」

男はシロヤの顔をのぞきこんだ。全身から異臭を放ち、口からはさらに強い臭いを放つ。

これは・・・酒だ。

バルーシは、持っていた物を男に渡すと、男は物を口に当ててひっくり返した。そこからまた臭う異臭。おそらくバルーシが持っていたのは酒だろう。

しばらくして、バルーシは男に言った。

「その方はシアン様が招待した客人、シロヤ様です。」

「ああん？客人！？ただの農民にしか見えんが！？」

事実なだけに否定できないシロヤ。苦笑いしながら、ブルーパは本題を持ち上げた。

「それで本題なんだけど、ちょっと協力してほしいことが」

「断る！」

ブルーパの言葉を途中で遮った。

「待ってくださいレジオンさん！今回の件はレジオンさんの力が！」

「知らねえよそんなもん！大体俺は引退した身だ！そんなやつ力なんか借りずにてめえで何とかしやがれ！」

シッシッシつとバルーシ達を追い返し、再び詰め所の中に入る。

「まあ・・・予想通りでしたね。」

バルーシが苦笑いした。

「にしても・・・レジオンがいなきゃ話にならないわ。別の説得方法を考えましょう。」

ブルーパも同じく苦笑いしたのち、四人は詰め所を離れた。

「しかし・・・これじゃ手がありませんよ。」

バルーシは頭を抱えた。それを見ながら、ブルーパとリーグンが同じように考え込んだ。

「私・・・もう一回レジオンのところに行ってくるわ。バルーシ、あなたも行くわよ。」

「はい！」

再びバルーシとブルーパが部屋を出ていった。

「あの・・・レジオンさんっていったい・・・？」

シロヤはリーグンに尋ねた。

「レジオンさんは、砂の竜王時代に兵団長に配属になった方です。今は体のことを考えて兵団長を引退、現在は兵士達の剣術指南等を主とした活動をしています。」

それを聞いた直後、部屋の扉が開いた。バルーシとブルーパが戻ってきたのかと思って振り向くと、そこにいたのは違う人だった。

「シロヤ君・・・だったかな？」

立っていたのは、さっきまで泥酔していた男、レジオンだった。しかし、今部屋に入ってきたレジオンに酒気はない。シラフのレジオンだ。

「そう・・・ですけど。」

思わず声に緊張の色が混じる。シラフのレジオンからは強い威圧感が発せられていて、歴戦を乗り越えてきた事がわかる。

「さつきはすまなかつたな。それで改めて、君と話がしたい。一緒に来てくれないか？」

「は……はあ……。」

シロヤはレジオンのあとについていった。しばらく歩いてたどり着いた場所は、城の見回り台だった。

「国ってなあ……難しいと思わねえか？」

見回り台の上で砂の国の大地を見ていたレジオンは、突然シロヤに話しかけた。

「この国の砂漠には、たくさんの人達の命が眠っているんだ。もちろんそれは、砂の竜王時代に散っていった人達だけじゃねえ。国をよくしようと尽力した歴代国王、そしてそれを支えた国民達皆の命も含めてだ。」

レジオンは遠くを見ながら、再び語りだした。

「俺はこうして……砂漠の風を感じながら砂漠を眺めるのが好きなんだ。」

砂漠の風がフワツとシロヤの髪を撫でた。

「今お前達が相手にしてる奴ってのは……そんな大地を、国を壊そうとしている奴だ。」

シロヤは砂漠を見た。たくさん命が眠る大地。それを再び戦いの大地に変えようとしているのがレーグ。改めてシロヤは、戦っている相手が強大だということを再認識した。

「そんな奴ら相手と……お前は戦うことができるか？」

レジオンはシロヤを見た。再度吹く砂漠の風。しかし、同じ風とは思えないほど、今吹いている風は重かった。

「誰も言わないから言うが、バルーシもブルーパもお前を過大評価しすぎだ。お前は戦士のように強いわけでもない。学者みたいに頭がいいわけではない。そしてお前はこの国の人間じゃないよそ者だ。」

はつきりと言うレジオン。しかし、シロヤはそれに聞き入ってい

た。

「こんなよそ者なんかを巻き込むなんて酷な話だぜ。それでもお前は、国を支配しようとしている脅威に立ち向かうことができるか？」
優しく吹く風がどんどんと強くなる。

「後戻りするなら今のうちだ。降りたきゃ降りろ。これは俺達バスのナダ国の問題だ。」

レジオンは見回り台を降りようとした。しかし、シロヤはレジオンの腕を握り、静かに呟いた。

決意

「俺・・・戦います！」

シロヤは凜とした声でレジオンに言った。対してレジオンは口を少し緩めた。

「関係ない話に首突っ込むのか？命を懸けてまで。」

シロヤは顔を引き締め、再びレジオンを見た。

「でも・・・目の前で人の命が危険にさらされているのを・・・見過ごすことはできません！」

「それが例え・・・見知らぬ他人でもか？」

「他人とかそんなの・・・関係ありません！」

シロヤは目線を緩めずにまっすぐとレジオンを見つめる。

「俺だって不思議ですよ・・・立ち寄った国でいきなりもてなされたり、かと思えば女王様の命を守れと言われたり・・・。」

「怖くないのか？」

「怖いです！下手すれば俺だって危ないのに・・・今からでも逃げ出したい気分です・・・。」

レジオンはシロヤを見た。うつむきながら話すシロヤの姿は、何故だか震えてるように見えた。

「でも・・・何だかこの国の人間とふれあったりしているうちに・・・何だか守りたいと思ってしまうんです。」

顔を上げたシロヤは、微笑みを浮かべていた。

「だから俺はできる限りのことをします。弱い俺は弱いなりに戦います。」

「ハッハッハー！よく言っただぜ兄ちゃん！」

さっきまでの雰囲気から一転、まるで酔っぱらったかのようにシロヤの背中を叩く。

「どうやら俺は兄ちゃんを過小評価してたみたいだな！あいつらの

目に間違いはなかったみたいだ！」

見回り台を降りて、シロヤを連れて歩くレジオン。

「お前になら・・・任せられるな。ついてこい！」

そう言ってレジオンはさらに奥へ歩いていった。

歩いた先にあつた場所は、暗くジメジメした狭い場所だった。

「あの・・・ここは？」

「城の各部屋の屋根裏に続いている隠し通路だ。作戦会議室だろうが屋根裏から覗けるぜ？」

レジオンとシロヤは、ほふく前進しながら奥へ奥へ進んでいった。
「城に長くいるからな、このくらいの知識はあつて当然だ。」

「でも・・・すごい狭いですよ・・・。」

「贅沢言つな。さあ、着いたぞ。」

レジオンが立ち止まつた場所は、通路の途中にある小さな小部屋だった。真ん中から光が漏れているのを見ると、おそらく小部屋の真ん中から作戦会議室を覗くことが出来るのだろう。

「声・・・聞こえますか？」

「静かにしてりや聞こえるさ。黙って聞くぞ、バレたらアウトだ。」

「では今回の会議での結果を最後確認します。」

わずかに聞こえる声、会議はどうやら終盤、ギリギリセーフだったようだ。そしてその会議を取り仕切る男の声、シロヤはよく知っていた。

「リーグ・・・。」

「あいつが計画に一枚噛んでいたとはな・・・。」

レジオンが呟いた。レジオンとリーグは、砂の竜王時代から人の上に立っていた、スピード出世した同期の二人だった。

会議はどうやら、議題とその話し合いの結果を最後に報告する段階だったようだ。

「では、星の入手方法を変更。リーグンを王族にすることで星を合

理的に入手する方法を断念、新たな計画として……。」

「シアン現女王の暗殺を実行しようと思います。」

「な！何だつムゲツ！」

「馬鹿……！でかい声を出すな……！」

慌ててレジオンがシロヤの口を塞ぐ。

しかし、レジオンも驚きの顔を浮かべていた。当然だ、今聞こえたリーグ達の計画は、”シアン女王の暗殺”なのだから。

「レジオンさん、どうにか止めないと……！」

「落ちて着け兄ちゃん、暗殺つたつてこれからやるわけじゃねえ。リーグもそこまで馬鹿じゃねえさ。」

レジオンはシロヤの横を通って、隠し通路を出ようとした。慌ててシロヤもついていく。

「暗殺するにも最適な場所があるつてもものだ。おそらく時期はこれから……。」

「時期……近々何か？」

「ああ、おそらくそれは……バスナダ国最大の祭り……。」

「最大の……祭り……？」

「ああ、全国民が一日中ごった返し、その中を女王様がパレードカーで通るんだ。おそらくそこを狙うだろう。その方がばれにくいからな。」

二人は隠し通路を抜け、立ち上がって埃を払った。

「なあ兄ちゃん、暗殺の件はブルーシ達には言わないでくれ。事を大きくされると動きづらいからな。」

レジオンはシロヤにお願いした。

「え？でもしたら俺……一人になっちゃうんじゃ？」

「心配するな！なんかあったら俺のところに来な。」

その言葉を聞いたシロヤは、安心したのか快く頭を縦に振った。
「すまねえな。俺も何かあったら話すぜ。じゃあ頼んだぜ。」

レジオンはドアを開けたところで立ち止まった。

「兄ちゃん！」

「は！はい！」

「あんたのこと・・・気に入ったぜ！いつか剣術でも教えてやるよ。」

そう言っレジオンは走り去っていった。その背中には、元兵士団長の力強さを放っていた。

不安

「シロヤ様、おかえりなさいませ。」

部屋に戻ると、いたのはリーグンだけだった。

「あれ？ブルーシ様とブルーパ様は・・・。」

「まだ帰ってきていませんよ。そういうシロヤ様はどちらに？」

そうリーグンが聞いた瞬間、シロヤの後ろから二つの足音が聞こえた。

「相変わらずの石頭ね、レジオンを味方につけるのは難しいかもね。」

「はい・・・しかし、レジオンさんの力は強力です。リーグを相手取るためにもやはり・・・。」

頭を抱えながら話す二人が部屋に戻ってきた。

部屋に戻った四人は、再び話し合いを始めた。議題は、「リーグはいつ何かしらの行動を起こすのか」だ。

シロヤを除く三人は、リーグの目的を知らない。しかし、何かしらの行動を起こすことは目に見えている。ならば、その行動をいつどのタイミングで起こすのが鍵となるのだ。

「リーグは”星夜祭”を狙って行動をするんじゃないかしら？」

「”星夜祭”・・・なるほど、それならば騒ぎに乗じて行動しやすい。」

「”星夜祭”・・・？」

シロヤは首をかしげた。

「星夜祭とは、この国最大の祭りです。星を祭りの中央に飾って恩恵を授かるという伝統的な祭りなんですよ。」

リーグンが補足してくれた。同時に、シロヤはレジオンの言葉を思い出した。もしリーグがシアンの暗殺を実行するならば、国最大の祭り、星夜祭が怪しいと・・・。

「ならこつちも早く行動に移さないとね。星夜祭は三日後だから。」
「三日後!？」

シロヤは間の抜けた声を出した。暗殺決行の日時があまりにも早いと思い、シロヤは思わず声をあげてしまった。

「しかし・・・明日から兵団は祭りの準備をしなければ。」

「なら私とシロヤ君でなんとかやってみるわ。」

ブルーパはシロヤを見てウィンクをした。シロヤも頭を縦に振った。

「僕もお手伝いできることがあったら言ってください。」

同じくリーグンもバルーシに向かって頭を縦に振った。

「すいません、私もできる限り探ってみます。」

四人はそれぞれ意思を確認して、部屋を出ていった。

「・・・」

時刻は夜。夕食を終えたシロヤは部屋で考えていた。

「シアン様の暗殺なんて・・・リーグは何が目的なんだ？」

元々は星が狙いはずなのに、リーグは星を諦め、シアン暗殺の実行を決めた。つまり、元々の狙いは星じゃないのかもしれない。

「リーグって・・・強いのかな・・・」

リーグの用心深い性格上、間違っても暗殺者を依頼するとは思えない。ならばリーグが直接手を下すか、七人衆の誰かが手を下すかどうかだ。

「・・・」

果たして勝てるのか。シロヤの頭にそんな事がよぎった。

ベッドから飛び降りたシロヤは、置いておいた愛用の剣を抜いた。鍛冶職人になった友人が旅立つ前にくれた剣だ。それを持って、軽く剣を振ってみた。

「ぎこちないな・・・。」とシロヤは思わず心のなかで呟いた。それも当然だ、シロヤの剣に型なんてない。

今までの旅でも、バシリスクやゴブリン、小さな鳥獣程度しか

相手にしたことがなかった。その程度なら、剣術を習っていれば誰でも倒せる相手故に、シロヤは力の弱さを痛感する。

実際、今日相手取った汚染植物には歯が立たなかった。プルーパーがいなければ、確実に自分は切りきざまれていたんだろう。「・・・外に出るか。」

急に外の風を感じたくなったシロヤは、そのまま部屋を出ていった。寝る前に戻ってくればクピンに心配をかけることもないだろう。シロヤは部屋を出た。

「あ！シロヤお兄様！」

部屋を出た廊下の先に、ローイエが立っていた。シロヤを見た同時に、ローイエはシロヤに向かってかけていった。

「お兄様、どうしたの？」

「ちよつと・・・夜風に当たりたくて・・・。」

「私、いいところ知ってるよ！今から行こう！」

ローイエはシロヤを引っ張って、城門とは逆方向に向かって歩き出した。

「この上！見晴らしいんだよ！」

やって来たのは、昼にレジオンと来た見回り台だった。

「あゝ！誰かいるよ？」

台に上がると、どうやら先客がいたようだ。

「クピンさん？」

「え？あ！シロヤ様に・・・ローイエ様！」

見回り台にいたのはクピンだった。メイド服のまま、風を感じながら景色を見ていた。二人を見るなり、急に萎縮し始めるクピン。

おそらく、王族であるローイエが目の前にいるというのが、萎縮してしまう一番の原因だろう。

「クピンちゃんも一緒！」

「わ！私なんかローイエ様のお隣だなんて！」

「もう！クピンちゃん緊張しすぎだよ！」

ほつぺたをぶにぶにするローイエ。背丈などを見る限り、二人は同じ年齢なのだろう。

緊張を落ち着けようと、ローイエはクピンの隣で景色を見始めた。それに合わせて、シロヤとクピンも景色を見た。夜の砂漠は神秘的で、それでいて優しかった。

「お兄様、この景色・・・好き？」

何故だが、今のローイエの声が幻想的に聞こえた。

予知

「私はこの景色大好き。でもね、最近砂漠が変わった気がするの。」
「砂漠が・・・変わった？」

目の前に広がる夜の砂漠は、確かに昼とは違った神秘的な印象があった。しかし、そんなことではないだろう。ローイエが見ているのは表面上だけではない、さらに奥深い何か・・・。

「何かが起こる・・・砂漠が壊れるような何かが起こる。」

ローイエの呟きはとてつもなく重く、それでいて暗い。

「・・・・・・・・・・。」

ふとシロヤは二人を見た。シロヤの目に映ったのは、体を震わせる少女の姿だった。しかしそれは寒さではない。これから起こるであろう未来を予知しているような震え、恐怖だ。

「ク！クピンさん！？」

「どうしたのクピンちゃん！？」

震えていたのはクピンだった。その震えは自分で止めようにも止められないようで、震えはさらに強くなりクピンの顔を青くする。

「いや・・・いやあ・・・いやああ！」

クピンは頭を抱えながら悲鳴をあげたのち、そのまま前に倒れこんだ。

「クピンさん！クピンさん！」

「お兄様！ブルーパお姉様のところに運びましょう！」

「気絶してるわ・・・。」

ブルーパがクピンの顔を覗きこんで言った。

「でも・・・どうして気絶なんか・・・。」

「・・・話しておいた方がいいかしらね。」

ブルーパはしばらく考えたのち、ゆっくりと語り出した。

「クピンをメイドとして雇ったのは、シアンじゃなくて私なのよ。」

クピンの顔を軽く撫でて、再び続けた。

「クピンには強い霊力があるのよ。それを自分で制御できないから、たまにこうやって暴走を起こすのよ。多分、今回の暴走が起こったことで未来が見えたんじゃないかしら。」

強い霊力を持つ者は、制御が難しく暴走を起こす。それはごく当たり前の話だ。

しかし、未来を見ることができるとは話稀である。よっぽど強い霊力がないと、未来を見るなんてことはない。

「まあ一日経てば目覚めるから心配しないで、さあローイエ、もう寝るわよ。」

ブルーパはローイエを部屋から出すと同時に、シロヤを見た。

「シロヤ君、ちょっといいかしら。」

ブルーパは重く言った。瞳が深く、それは見ているだけで吸い込まれそうだ。

「クピンは未来を見て気絶した。その意味がわかるかしら？」

シロヤは考えた。

「えっと・・・霊力が強すぎて負担になったからですか？」

「いいえ、原因は”見えた未来”よ。」

ブルーパは顔を伏せた。おそらく、ブルーパも信じたくないのだろう。

「クピンが見た未来は・・・おそらく星がレーグに奪われた未来よ。」

「ええ！じゃあ未来はもう決まって！？」

「いいえ、あくまでもその可能性が一番高いって話よ。クピンには耐えられない未来の映像だったみたいね・・・。」 心配そうにクピンを見る二人。青かった顔は少しずつ戻っているようだ。

「クピンは私が看病するわ。シロヤ君、今日はもう休みなさい。」

「は・・・はい。」

ブルーパに促され、シロヤは部屋を出た。

シロヤは少し考え込んだ。

「未来……。」

クピンが見た未来、恐怖に飲まれ気絶する程の未来。いったいどんな未来なのか。

「……。」

星が奪われ、シアンは暗殺され、バスナダがリーグの手に落ちたでしょう。そしたら他の人たちはどうなるだろうか。

おそらく、リーグの計画を知っている、そして知ろうとしている人は処刑されるだろう。ということは、ロイーエも、ブルーパも、バルーシも、レジオンも、そしてシロヤも……。

「……いやいや駄目だ！」

頭を軽く振って考えていたことを消す。マイナス方向に考えていてはキリがない。そう思って布団に入る。

「………！！！」

一度出たマイナス思考は消えない。布団に入って忘れようとすればするほど、どんどんと深く思考が頭をめぐる。

次第にシロヤは恐怖を覚えた。広い部屋に一人にいるということが、さらに恐怖心を強くする。

いつしかシロヤは、体をブルブルと震わせていた。

ガチャ……。

「……！！！」

急に開いた扉、シロヤは反射的に剣を握った。

「ど！どうしたのだ！？何かあったのか？」

シロヤは手を下ろした。

「シアン様……！」

部屋に入ってきたシアンだった。シアンはシロヤのベッドに上がり、シロヤに寄り添った。

「どうしたのだ？汗だくではないか。」

いつの間にか、シロヤは汗だくになっていた。

「私が・・・拭こうか？」

頬を少し赤くして、シアンは呟いた。

「いや！あ・・・遠慮します・・・。」

激しく拒否すると失礼だと思ったシロヤは、最後に小さく拒否の言葉を呟いた。

「ふむ・・・嫌ならいいだろう。」

シアンは寄り添いながら呟いた。

「そういえば、そなたにしかできぬことの話だが。」 シアンは、シロヤを見つめながら呟いた。

「私と共に・・・この国を支える王に・・・なってほしい・・・私と・・・結婚して・・・ほしい・・・。」

告白

「ええええええ！！！」

シアンがシロヤに用意した席、それは国を統べる者の席、王の席だった。

「お！お！俺が・・・おうに！？じよ！冗談ですよね！？」

「冗談ではない．．．私と．．．結婚して．．．王になって．．．ほしい．．．。」

シアンの顔がトマトのように赤く染まる。今、シアンが放った言葉は、間違いなく”告白”だ。

女王の告白を受け戸惑うシロやは、口をパクパクさせて首を忙しく動かすことしかできなかった。

「……どうだ？それとも私は……魅力的ではないか？」

潤んだ瞳で上目使いをするシアン。

もちろんシロヤから見て、シアンが魅力的に映らないわけがない。ロングの髪の毛に華やかなドレス、綺麗な顔立ちにスタイルは誰もが魅了される。見た目だけではなく、性格や気配りも一級品。シアンは一国を統べる姫なのだから、そんなことは当然と言えるが、それはあくまでもシロヤからかけ離れた世界、王族や貴族などでの話だ。

単なる農民が姫と結婚、しかも恋愛結婚など、世界をひっくり返しても事例は出てこない。

「どうした……？私は早く……そなたの返事が聞きたい……」

シアンの腫がどんどん潤んでいく。じつとシロヤを見つめるが、当の本人はまだまだ正気を保っていられない状態だった。それに気づいたシアンは、シロヤの頬に手を当てた。

「むう……やはり急に王になると言われても……答えるのは難

しいか。」

シアンは優しく微笑んだ。

「ならば・・・そなたにこの国をもっと好きになってもらいたい。」

シアンはベッドから降りて、カーテンを開けて窓を見た。砂漠の夜の空は遮るものがなく、美しい星が国の空を彩っている。

「三日後、この国をあげて行われる最大級の祭り、”星夜祭”に、そなたを国賓として招待しよう。そこで、この国をもっと好きになつてもらいたい。」

星空の光が部屋に差し込み、シアンを照らす。シロヤは何故か、星の光を浴びるシアンが神秘的に見えた。

「私たちバスナダ国一同、最大限のおもてなしをしよう。そして、星夜祭の終わりに、そなたの答えを聞きたい。」

三日、それはシロヤが答えを出すために考える時間。そして、答えを出すためにリーグの野望を止めなくてはいけない制限時間。シロヤにとって残された猶予だ。

「わかりました・・・三日・・・考えてみます。」

シロヤは小さくうなずいた。それを見たシアンの顔は、優しさを含んだ微笑みを浮かべていた。

「うむ、良い答えを期待しておるぞ。」

そう言つてシアンは、再びベッドに入り、シロヤに寄り添った。

「では今日はここで寝させてもらうぞ。」

シロヤの横にシアンも横になり、添い寝の形をとった。

あれから時間は経っていない。しかし、シロヤには何時間もの長い時間に感じた。シアンはずっとシロヤに寄り添っている。

ふと、シロヤはシアンに尋ねた。

「シアン様、この国の人たちは好きですか？」

「もちろんだ、民は皆、家族であると私は思っている。」

女王らしい答えだが、シロヤにとっては違和感しか生まれない答えだった。シロヤは続けた。

「もちろん・・・家臣も皆ですよね？」

「無論、家臣も皆バスナダの民だ。誰一人とて例外はない。」

シロヤの顔が曇った。聞いてはいけない質問をしたのではないか、という考えが頭をよぎる。そして、次にシロヤが口にした言葉も、また聞いてはいけない質問だった。

「もし・・・家族の誰かが・・・シアン様を暗殺しようとしても・・・ですか？」

即座にシロヤは後悔した。こんな質問はするべきではない。それがわかっていても、確認だけはしておきたかった。

曇った表情のシロヤとは対称的に、シアンの顔は微笑みを浮かべていた。

「もし私が狙われているのならば、喜んで受けよう。私は逃げも隠れもしない。命が欲しいのならば、くれてやる覚悟だ。」

覚悟、シアンの言葉に嘘偽りはない。清々しくらいにまつすぐな答え。しかし、シロヤは清々しさを感じる余裕なんてなかった。

シアンは、今自分が狙われていることを知らない。当然の話なのだが、シロヤにはきつい現実だ。

「シアン様は・・・強いお方なのですな。」

「そなたも強いではないか。見ず知らずの私を魔の物から守ってくれたのだ。」

シアンはシロヤに向かって微笑んだ。しかし、シロヤは再び顔を曇らせた。

俺は強くなんかない・・・。助けたのは単なる良心、もし襲っていたのがバシリスクでなければ、シロヤは逃げていたかもしれない。シロヤは何も喋ることが出来なくなった。

そのまま、無音の空間が二人を包み込む。シロヤは、色々とありすぎた今日の出来事を思い出す前に、深い眠りについてしまった。その頬を撫でながら、シアンも深い眠りについた。

案内

爽やかな砂漠の朝日が窓から降り注ぎ、シロヤは朝日を感じながら、ゆっくりと目を開けた。

隣にいたシアンは、シロヤよりも早く起きて朝の会議に向かったようだ。

とりあえず起きようと、シロヤはベッドから飛び降りて、軽い運動を始めた。

「・・・シロヤ様。」

「・・・うわぁ！」

突然聞こえた声、ドアのところにいたのは、意外な人物だった。

「レーグ・・・様。」

やって来たのはレーグだった。相変わらず人を小バカにしたように嘲笑いながら、シロヤの部屋を見ている。

「・・・何ですか？」

「ヒヒヒヒヒ、女王様の命によりシロヤ様のお目付け役を頼まれましてね。ヒヒヒヒヒ。」

相変わらずムカつく笑い声だ。

「お目付け役・・・？具体的に何を・・・？」

「城の中の案内をするように頼まれましたので、今日は城の案内をさせてもらいます。ヒヒヒヒヒ。」

シロヤは不服そうに頷いた。よりによってレーグに案内されるとは・・・。

「なにかご不満ですか？ヒヒヒヒヒ。」

「いえ・・・何も・・・。」

「あら？レーグと・・・シロヤ君？」

部屋を出てすぐの廊下にいたのは、寝起きのブルーパだった。ボサボサの髪の毛のまま、レーグについていくシロヤを見ている。

「ヒビヒビヒ、プルーパ様。今日は私がお目付け役を任されましたからお気になさらず。ヒビヒビヒ。」

その言葉に、プルーパは顔をしかめた。シロヤと同じく不服そうに見つめている。

「まあ・・・いいわ。それよりも、いくら大臣でも宝物庫は入らないようにね。」

「おやおや？よそ者が入っているのに大臣はダメなのですか？ヒビヒビヒ。」

よそ者、それはおそらくシロヤのことだろう。昨日、プルーパに連れていかれて入った宝物庫、星が安置されている場所だ。

「あら？何のことかしら？あそこには王族しか入っていないはずよ？」

そう言っただけでプルーパは、小さくシロヤにウィンクをした。これはおそらく、シアンと結婚して王族になれただけのことだろう。

「ヒビヒビヒ、まあいいでしょう。では案内を続けましょう。」

そう言っただけで、プルーパは廊下を歩いていった。その後ろ姿を、プルーパは見えなくなるまで見つめていた。

城の中は思いの外広く、全階層を案内されるだけで朝の大半の時間を使ってしまった。

そしてたどり着いたのは、砂漠が見渡せる見回り台だった。

「ここはいいところですよ。砂漠の風を感じながら砂漠を見ることができるところから。」

プルーパは景色を見ながら呟いた。しかし、レジオンのように景色を、風を体一杯に感じながら言っただけの言葉とは正反対、うわべだけの感動だ。

シロヤは少し苦笑しながら景色を見た。街では、人がせわしなく動き回っている。

「あれは三日後に行われる星夜祭の準備ですね。」 見ると、バルーシも物資の運搬をしている。

「星夜祭は、我がバスナダ国の宝である星を崇める由緒正しい祭りなんですよ。星夜祭はバスナダ国民のみが参加できる祭りだと言われていましたね。何せ・・・大事な星を崇める祭りですからね。盗まれたりしたら一大事ですからね。」

これはおそらく、遠回しにシロヤに”早く消えろ”と言いたいのだろう。もちろんバスナダ国民のみが参加できるなんてのは嘘である。

見え透いた嘘をつくな、とシロヤは苦笑する。

「昨日、シアン様から正式に星夜祭に招待されました。」

含み笑いをしながら、シロヤはレーグに言った。それを聞いたレーグは、少し表情を曇らせた。

「そんな話は聞いてないんですがね・・・まあいいでしょう。」
してやったり、とシロヤは内心喜んだ。

「この先が王室です。」

最後に来たのは、豪華な造りの扉の前、シアンがいる王室の前だった。

「では私はこの辺で。お帰りの順路はもうわかりますよね？ヒヒヒヒ。」

そう言って、レーグはシロヤを置いて小走りで行っていった。

「え？ちよつとレーグさん！」

まるでさっきの仕返しかと言わんばかりだった。シロヤは豪華な部屋の前でボーッとするしかできなかった。

ようやく部屋についたシロヤは、ベッドに転がり込んだ。

そのまま寝てしまおうと思った瞬間、ドアがノックされた。

「シロヤお兄様〜！」

「シロヤ君〜！」

ドアの向こうからシロヤを呼ぶ声、声から察するにローイエとプルーパだ。

「は！はあい！」

慌ててシロヤはドアを開けた。ドアの向こうにいたのは、ローイとブルーパ、そして、

「昨夜は・・・よく眠れたか？」

「シ！シアン様！？」

三人の服装は地味なものだった。まるで街娘みたいな格好で、ローイは結んでいた髪を解いていた。

「これから三人で行くところがあるの。シロヤ君も来てくれないかしら。」

「行くところ・・・ですか？」

「そうだよ！お兄様も王様になるんだったら必ず行かないといけないんだよ！」

「こ、こらローイエ！・・・すまぬな、一緒に来てはくれないか？」
急な話ではあったが、シロヤは快く了承した。

墓前

地味な格好の三人とシロヤは、王室の奥へと歩いていった。

「あの・・・何をするんですか？」

そう聞いたシロヤがたどり着いたのは、王室の奥の通路のさらに奥だった。

「さあ、この奥だ。」

シアンが扉を開けると、正午の光が降り注いだ。どうやら屋外に繋がっているようだ。そしてその先にあったのは、たくさんのお墓だった。

「ここは・・・先代国王達が眠っている場所よ。私達王族は月に一回、先代達のお墓参りに行かないといけないの。」

シアンは王室から持ってきた花を出し、一番奥のお墓に花を手向けた。

「お父様・・・もうすぐ星夜祭が始まります・・・必ずや星夜祭を成功させます。どうか安らかに眠りください。」

軽く手を合わせて黙祷するシアン。それに続いて、後ろの三人も黙祷する。

「・・・先代国王は、バスナダ国を軍事国家にした国王なの。そして・・・私達を育ててくれたお父様なの。」

シロヤは声を出さずに驚いた。

「お兄様、シアンお姉様はね、ずっと一人で頑張ってきたんだよ。」

お父様の残した傷痕と戦いながらね・・・。」

「こら！ローイエ！」

ブルーパがローイエに怒鳴った。ローイエも幼いながら、言っただけはいけないことを言っただと直感で理解した。

「いや・・・いいのだ。確かにお父様は傷痕と呼ぶに等しいものを残していった。だからこそ私達が、私達で変えていかねばならぬのだ。」

シアンの目はまっすぐに、それでいて凜々しかった。

「今年の星夜祭はその第一歩だ。だから、プルーパお姉様にも、ロ
ーイエにも協力してほしい。」

「何を今さら言ってるのよ、そんなの当たり前じゃない。」

「もちろんだよお姉様！私も頑張るよ！もちろんお兄様も！」

「うんうん」

三人は互いにうなずきあつた。そこには、国を変えようという強い意志があつた。

「ではそろそろ行こうか。」

シアンは立ち上がった、王室に向かって歩き出した。その後ろについていくローイエとブルーパ。

「シロヤ君？」

ブルーパが後ろを振り向くと、シロヤが墓前に立っていた。後ろ姿は何故か、誰にも打ち砕かれないような強い力を感じる。あれは……決意だ。

「プルーパ様……シアン様が望んでいるのはこの国の平和な未来なんですよね……。」

「……そうですね。」

そう聞いたシロやは、墓前に座り込んで手を合わせた。

「先代国王様……私は旅の者、シロヤという者です。」

淡々と語り出したシロヤ。

「今……シアン様が望む平和な未来を……脅かす者が現れて
います。ですがご安心ください。シアン様の体を任された以上、どん
な脅威にも、俺は立ち向かいます。例え、この身が朽ちようと……
。」

「深々と頭を下げるシロヤ。その頭を、ブルーパは軽く撫で
た。

「ブルーパ・・・様？」

「シロヤ君だけじゃないですよ、お父様。私達は皆、シロヤ君の味方です。そして・・・シアンの味方です。」

二人は再び黙祷した。
黙祷を終えた二人は、静かに立ち上がって歩き出した。

お墓参りを終えたシロヤは、王室の来賓用椅子に座っていた。用事があるとブルーパが残させたのだ。

しばらく待っている、ブルーパは奥から走って戻ってきた。

「お待たせ、これが星夜祭の動きよ。」

渡された紙の裏には、”超重要”と書かれていた。

表に書かれていたのは、どうやら星夜祭の全体の動きのようだ。出店の概要から、パレードカーの動きまで事細かに書いてあった。

「これがあれば、リーグの動きも予測しやすいでしょう？」

「でも・・・これって機密事項じゃ・・・。」

ブルーパは、そう言ったシロヤの唇にそつと指を当てた。

「ひ・み・つ・よ？シロヤ君。」

最後に軽くウインクをして、再び紙に目を戻した。

「さ、バルーシもないしさっさと済ませちゃいましょう。まずは・

・・・」

部屋に戻ったシロヤは、ブルーパからもらった紙に目を戻した。紙には、予測した時間やそれに合わせての動きがメモしてあった。

「・・・。」

しばらく見たのち、シロヤは目を背けた。

あと二日後、リーグと対決をする。その事実が、シロヤを震えさせた。

考えてみれば、長い旅の中で対人戦を経験したことがない。そして、未知数であるリーグの力。

「・・・。」

思っではいけないと思っても、自然と頭に浮かぶ最悪のシナリオ。だんだんとシロヤは、自分の頭の中に怒りを覚え始めた。

「・・・アー！」

怒りを言葉に変えたのち、力任せにドアを開けた。ドアの先にいたのは、勢いよく開いたドアにビックリして座り込んでいる少女だった。

「・・・・・・・・クピンさん？」

「シ！シロヤ様！」

すぐさま立ち上がり、服の埃を軽く払って、シロヤの方を向いた。
「さ！昨晩はシロヤ様やローイエ様のお手を煩わせてしまつて！本当に申し訳ありませんでした！」

震えながら頭を下げるクピン。その頭を上げさせたシロヤの顔は、安堵に包まれていた。

未来

「クピンさん！よかった〜！目が覚めたんだ！」

シロヤはぴょんぴょんと跳ねて喜んだ。

「本当に申し訳ありませんでした！シロヤ様のお手を煩わせて・・・。」

「そんなとんでもない！俺はクピンさんが無事で本当によかったですよ！」

クピンの手を握って一緒に跳ねる。シロヤと跳ねるクピンの顔は、キョトンとしていた。

「あの・・・。」

「あ・・・ごめんなさい・・・。」

我にかえったシロヤは、クピンの手を離して頭を下げた。

「と、とにかく、クピンさんが無事で本当によかった。とりあえず中で話しましょう。」

「それなら私も一緒にいいかしら？」

突然聞こえた声、声の主はブルーパだった。

「ごめんなさいね、シロヤ君。私まで加わっちゃって。」

今シロヤの部屋にいるのは、シロヤとクピンとブルーパだ。三人は円を描くように座っている。

「あの・・・ブルーパ様！看病していただき！ありがとうございます！す！」

王族の隣ににいるという緊張感でガチガチのまま、ぎこちなくクピンはブルーパに頭を下げた。

「固くなりすぎよ、クピン。リラックスリラックス。」

クピンの頭を撫でるブルーパ。しかし、クピンの緊張は解れていない感じはしない。

「それよりクピン、あなたにちょっと聞きたいことがあるんだけど・

「・・・いいかしら？」

ブルーパの顔が引き締まる。

「クピン、あなた・・・未来を見たのかしら？」

シロヤは目を丸くした。まさかブルーパからそれを引き出すとは思わなかった。

クピンの表情が曇る。何となく、ためらっているような表情だ。

「いえ・・・見ていません・・・。」

うつむきながらクピンは答えた。少し声が震えているようだ。

それを見たブルーパは、少しだけ微笑んだ。

「そう・・・わかったわ。ごめんなさいね。」

少し間を空けたのち、ブルーパはそのまま部屋を出ていった。

「あの・・・シロヤ様。」

静寂を破ったのはクピンだった。

「さっきの話なんですが・・・シロヤ様になら言える気がします・・・。」

今まで見たことない、クピンの強い表情。今まで見せていたおろ

おろとした表情とは全く違う表情だ。

「ク・・・クピンさん・・・？」

「お話しします。私があの時見た夢を・・・。」

クピンはゆっくりと語り出した。

暗くなつた空には、砂漠を照らす星も月も輝いていない。

「ヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

暗い砂漠に響く含み笑い。そびえ立つ砂丘には、シロヤが今まで感じていた優しさは、欠片すらなかった。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

さらに響く含み笑い。その先にそびえる巨大な城には、絶望を宿した屍しかなかった。

その屍は多種多様だ。黒毛の馬、黄色い髪の少女、ドレスに身を

包んだ女性、メイド服を着た少女、銀の鎧に身を包んだ兵士、歴戦を乗り越えた老兵。

そしてその中央にそびえ立つのは、きらびやかなドレスに身を包んだ女王と、白髪の旅人が寄り添って倒れていた。

「……」

不気味に響く含み笑い。

街は、輝きを失った空よりも暗く、行き交う人々は誰一人としていない。

「.....」

誰にも止められなかった含み笑い。

その手に見えるのは、砂漠からは見えない星と月の輝きを集めたような輝き。

[illegible]

暗黒に包まれたバスナダ。屍へと姿を変えた王族と反乱者。生気
と笑顔を無くした国民。

バスナダは、一人の男によつて姿を変えた。人の力を何倍にも増幅する国の宝、星。

星は落ちたのだった。独裁者、リーグの手によって……。

「.....」

「なんですか……それ……。」

シロヤは絶句した。クピンから聞かされた話は、シロヤにとって
は最悪のシナリオであつた。

無言のまま、クピンはゆっくりと顔を下げた。

「私にもわかりません．．．あの時．．．急に目の前が真っ暗になつて．．．今の映像が頭に流れてきました。私にもわかりません．．．これがプルーパ様が言っていた未来なのかどうかは．．．。」

クピンはどうやら、自分に強い霊力があることを知らないようだ。シロヤはゆつくりと頷いて、言葉を探した。

「そうですか・・・ありがとうございます。」

そのまま会話を終えようとしたシロヤ。しかし、クピンがさらに言葉を続けた。

「シロヤ様・・・。」

クピンの声は震えていた。自分が見た夢が怖いのだろうか。

「シロヤ様・・・もう、頼めるのはシロヤ様しかないと思うんです。」

「え？だって他にもバルーシさんとかブルーパ様だって」

「何でかわからないんですが・・・シロヤ様なら・・・私達バスナダ国を守ってくれると思うんです。」

クピンしか感じない、第六感に似た何か。強い霊力があるクピンだからこそその直感だった。

その直感を信じたクピンが、顔を引き締め、ゆつくりと顔を上げた。

「お願いですシロヤ様！どうかバスナダをお救いください！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8669x/>

Sand Land Story ～砂に埋もれし戦士の記憶～

2011年11月20日03時22分発行